

東野お茶屋台遺跡 6次調査地

2006

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

ひがし の ちや や だい

東野お茶屋台遺跡 6次調査地



2 0 0 6

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財團
埋蔵文化財センター

巻頭図版 1



調査地全景（南西より）

卷頭図版 2



20号墳出土須恵器



2区出土鉄器



24号墳出土須恵器

序

本書は、平成16年度に松山平野北東部の桑原地区で民間の宅地造成に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

桑原地区は、松山市の水瓶“石手川ダム”から南西方向に流れる石手川の南岸に位置しています。この地区ではこれまで宅地の開発などに伴って実施された発掘調査によつて、平野部には弥生時代から古墳時代の集落、丘陵部には群集墳が存在することが確認されています。

今回調査を行いました東野お茶屋台遺跡6次調査地は、江戸時代に松山藩主の隠居所としてつくられた庭園と御殿が存在した場所「県指定史跡 東野お茶屋跡」と同一丘陵上にあります。調査では江戸時代の遺構は見つかりませんでしたが、丘陵のほぼ全域が古墳時代の墓域として利用されていたことが分かりました。

墳丘の大部分は失われており、主に古墳の周溝に対する調査となりましたが、計6基の古墳を確認し、また周溝の内部からは一括性の高い須恵器類が出土しています。

このような成果をあげることができましたのも、関係者各位の皆様の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のたまものであり、厚く御礼を申し上げます。

松山市内には、我々の知らない貴重な文化財が多く残されていると考えられます。埋蔵文化財の保護ならびに発掘調査に対する一層のご理解とご協力の程よろしくお願ひ申し上げます。

本書が埋蔵文化財の調査・研究の糧となり、ひいては文化財保護・教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成18年3月31日

財團法人松山市生涯学者振興財團

理事長 中村時広

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが、平成16年7月16日から同年10月15日にかけて宅地造成に伴い実施した、松山市東野4丁目乙222番2、3、223番の一部における埋蔵文化財発掘調査の成果報告書である。
2. 本書に使用した方位は世界測地系に基づく座標北で、調査に伴う基準点の設置は株式会社ウエスコに委託した。
3. 遺構の測量は、発掘担当調査員および栗林和孝、保島秀幸が担当した。また、遺物の実測及び製図は、調査員および丹生谷道代、矢野久子、多知川富美子が担当し、一部の遺構図に関してはデジタルトレースを導入した。
4. 遺物の接合・復元作業は、渡部英子、青野茂子、西川千秋、松本美代子および丹生谷道代、矢野久子、多知川富美子が担当した。
5. 現場における写真撮影は、調査員及び大西朋子がおこない、遺物撮影および現像、写真図版のレイアウトは大西朋子が行った。
6. 本書に関する遺物および記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
7. 本書の執筆・編集は吉岡和哉がおこなった。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査・刊行組織	1～2

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置	3
2. 環境	3～8

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の経過	9～10
2. 調査地の土層	12

第Ⅳ章 遺構と遺物

1. 試掘調査	16
2. 本発掘調査	
(1) 調査地の表土内から出土した遺物	18
(2) 1区の調査	18～24
溝状遺構（SD 1、2、3、4、5、6、7）、小穴（SP 1～SP 10）、20号墳	
(3) 2区の調査	25～41
21号墳、22号墳、23号墳、24号墳、14号墳	

第Ⅴ章 まとめ

1. 調査の成果	42
2. 東野お茶屋台遺跡の整理と古墳の位置づけ	42～45

挿図・表目次

第1図	周辺遺跡分布図	4
第2図	調査地位置図	7
第3図	遺構配置図	11
第4図	1区壁面上土層測量図	13
第5図	2区壁面上土層測量図(1)	14
第6図	2区壁面上土層測量図(2)	15
第7図	試掘調査トレーンチ配置図	16
第8図	試掘調査出土遺物実測図	17
第9図	調査地表土内出土遺物実測図	19
第10図	1区遺構配置図	21
第11図	20号墳測量図	22
第12図	20号墳出土上遺物実測図	23
第13図	20号墳周溝内遺物出土状況測量図	24
第14図	2区遺構配置図	27
第15図	21号墳測量図	28
第16図	21号墳出土上遺物実測図	29
第17図	21号墳堆積土内遺物出土状況測量図	30
第18図	21号墳周辺堆積土内出土遺物実測図(1)	31
第19図	21号墳周辺堆積土内出土遺物実測図(2)	32
第20図	22号墳出土遺物実測図	33
第21図	22号墳測量図	34
第22図	23号墳出土上遺物実測図	35
第23図	23号墳測量図	36
第24図	24号墳測量図	38
第25図	24号墳出土遺物実測図	39
第26図	14号墳出土遺物実測図	40
第27図	14号墳測量図	40
表 1	東野お茶屋台遺跡 古墳時代墳墓一覧	46
表 2	試掘調査 出土遺物觀察表 土製品	49
表 3	調査地表土内 出土遺物觀察表 土製品	50
表 4	20号墳 出土遺物觀察表 土製品(No.1)	51
表 5	20号墳 出土遺物觀察表 土製品(No.2)	52
表 6	21号墳 出土遺物觀察表 土製品(No.1)	52
表 7	21号墳 出土遺物觀察表 土製品(No.2)	53

表 8	21号墳周辺堆積土内 出土遺物觀察表	土製品(No.1)	54
表 9	21号墳周辺堆積土内 出土遺物觀察表	土製品(No.2)	55
表 10	21号墳周辺堆積土内 出土遺物觀察表	土製品(No.3)	56
表 11	21号墳周辺堆積土内 出土遺物觀察表	土製品(No.4)	57
表 12	22号墳 出土遺物觀察表	土製品	57
表 13	23号墳 出土遺物觀察表	土製品	58
表 14	24号墳 出土遺物觀察表	土製品(No.1)	58
表 15	24号墳 出土遺物觀察表	土製品(No.2)	59
表 16	14号墳 出土遺物觀察表	土製品	59
表 17	調査地表土内 出土遺物觀察表	金属製品・石製品	60
表 18	24号墳 出土遺物觀察表	金属製品	60

写真図版目次

卷頭図版 1 調査地全景（南西より）

卷頭図版 2 20号墳出土須恵器 2区出土鉄器

卷頭図版 3 24号墳出土須恵器

図版 1 調査前近景（西より）

2区掘削状況（南西より）

2区作業風景（北西より）

図版 2 遺構検出状況（南西より）

図版 3 20号墳検出状況（北東より）

20号墳完掘状況（北より）

図版 4 20号墳周溝内遺物出土状況（北西より）

1区遺構完掘状況（北西より）

図版 5 2区遺構検出状況（北東より）

2区遺構完掘状況（北東より）

図版 6 21号墳上層流土内中世遺物出土状況①（北西より）

21号墳上層流土内中世遺物出土状況②（南東より）

21号墳周溝上層遺物出土状況（南東より）

- 図版7 21号墳完掘状況（北東より）
21号墳周溝内遺物出土状況（西より）
- 図版8 2区南側遺構検出状況（北東より）
2区東側遺構完掘状況（西より）
- 図版9 22号墳完掘状況（北東より）
14号墳完掘状況（東より）
- 図版10 24号墳完掘状況（西より）
24号墳遺物出土状況（北東より）
- 図版11 試掘調査および調査地表土内出土遺物
- 図版12 20号墳周溝内出土遺物
- 図版13 21号墳周溝内出土遺物①
- 図版14 21号墳周溝内出土遺物②
21号墳上層流土内出土遺物
- 図版15 21号墳周辺堆積土内出土遺物①
- 図版16 21号墳周辺堆積土内出土遺物②
22号墳周溝内出土遺物
23号墳周溝内出土遺物
- 図版17 24号墳周溝内出土遺物

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成16年2月6日、株式会社 上浮穴産業より松山市東野4丁目乙222番2、乙222番3における埋蔵文化財の試掘・確認調査の申請が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。宅地造成に伴うもので、申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No.79お茶屋台古墳群」内に所在する。

申請地の周辺には、県指定史跡 東野お茶屋跡が存在するほか、これまでに東野お茶屋台遺跡として5度の発掘調査が実施されており、特に5世紀から6世紀にかけての古墳が濃密に分布することが判明している。

上記の事実をふまえた上で平成16年2月24日（火）、文化財課は申請地における埋蔵文化財の有無を判断するために試掘調査を実施した。

試掘調査では申請地内に16本のトレンチを設定し、埋蔵文化財の確認調査を行った。その結果、申請地の南側に偏った位置より古墳の周溝と考えられる溝状遺構を確認し、事前の発掘調査が必要であると判断された。

試掘調査の結果を受けて、株式会社 上浮穴産業、文化財課及び財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターは協議を重ね、埋蔵文化財が存在する可能性の高い箇所に対して本格調査を実施する運びとなった。

調査に先立ち、今回東野お茶屋台遺跡内における6回目の調査である為、遺跡名称は東野お茶屋台遺跡6次調査地に決めた。また、遺跡の位置するお茶屋台古墳群内では、これまで19基の古墳が確認されていることから、新たに古墳が発見された場合は20号墳から名称を付与することを決定した。

2. 調査・刊行組織

本調査に伴う調査・刊行組織は以下の通りである。

[調査組織]（平成16年10月2日現在）

松山市教育委員会	教育長	土居 貴美
事務局	局長	久保 浩三
	企画官	石丸 修
	企画官	丹生谷博一
	企画官	渡部 一
	企画官	仙波 和典
文化財課	課長	篠原 忠人
	主幹	家久 則雄
	副主幹	田城 武志
	主査	栗田 正芳

(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	中村 時広
	事務局長	三宅 泰生
	事務局次長	石丸 充良
	事務局次長	池田 政勝
埋蔵文化財センター	所長	杉田 久憲
	専門監兼学芸係長	早瀬 忠幸
	次長兼調査係長	西尾 幸則
	管理係長	岸本 照修
	調査担当	吉岡 和哉・栗田 茂敏

[刊行組織] (平成18年3月31日現在)

松山市教育委員会	教育長	土居 貴美
事務局	局長	石丸 修
	企画官	松本 義文
	企画官	仙波 和典
	企画官	江戸 通敏
文化財課	課長	森原 忠人
	主幹	家久 則雄
	上幹	田城 武志
	主査	栗田 正芳
(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	中村 時広
	事務局長	一色 巧
	事務局次長	石丸 充良
	事務局次長	丹生谷博一
	事務局調査監	杉田 久憲
埋蔵文化財センター	所長	丹生谷博一
	次長兼管理係長	重松 幹雄
	次長兼調査係長	西尾 幸則
	学芸係長	大北 冬彦
	調査担当	吉岡 和哉・栗田 茂敏

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

松山市は愛媛県のほぼ中央部、瀬戸内海に面して開けた県下最大の沖積平野「松山平野」の北部を中心に栄える地方都市で、遺跡は市のシンボルである松山城の東部から南東部にかけて広がる「桑原地区」に位置する。

桑原地区は大部分が石手川によって形成された古期扇状地上に位置し、わずかに東側の一部が芝ヶ岬よりのびる丘陵及び低位段丘(下位砂礫台地)上に位置する。

東野お茶屋台遺跡6次調査地は、石手川の南岸、芝ヶ岬からのびる洪積台地上に位置し、基盤は和泉砂岩層を含んだ黄橙色系の粘質土で、海拔高度約67mを測る。

2. 環境

東野お茶屋台遺跡6次調査地の所在する地域は、古代温泉郡(湯郡)にあたると考えられ、郡内に孝徳太子の来浴伝承で知られる道後温泉を内包する。また当地域は、建武年間に河野通盛が湯榮城を築いたことで政治経済の中心地となり、さらに慶長八年、加藤嘉明が勝山に松山城を築き、伊豫国の中核として栄え現在に至る。

調査地は、郡内でも特に桑原郷に否定される地域に所在し、中世後期に河野氏一門の桑原氏、松末氏、垂木氏などが城館を構えていた地域として知られる。また、遺跡が立地する丘陵には県指定史跡東野お茶屋跡が所在し、周囲の丘陵部には占墳時代の群集墳が多く築かれている。

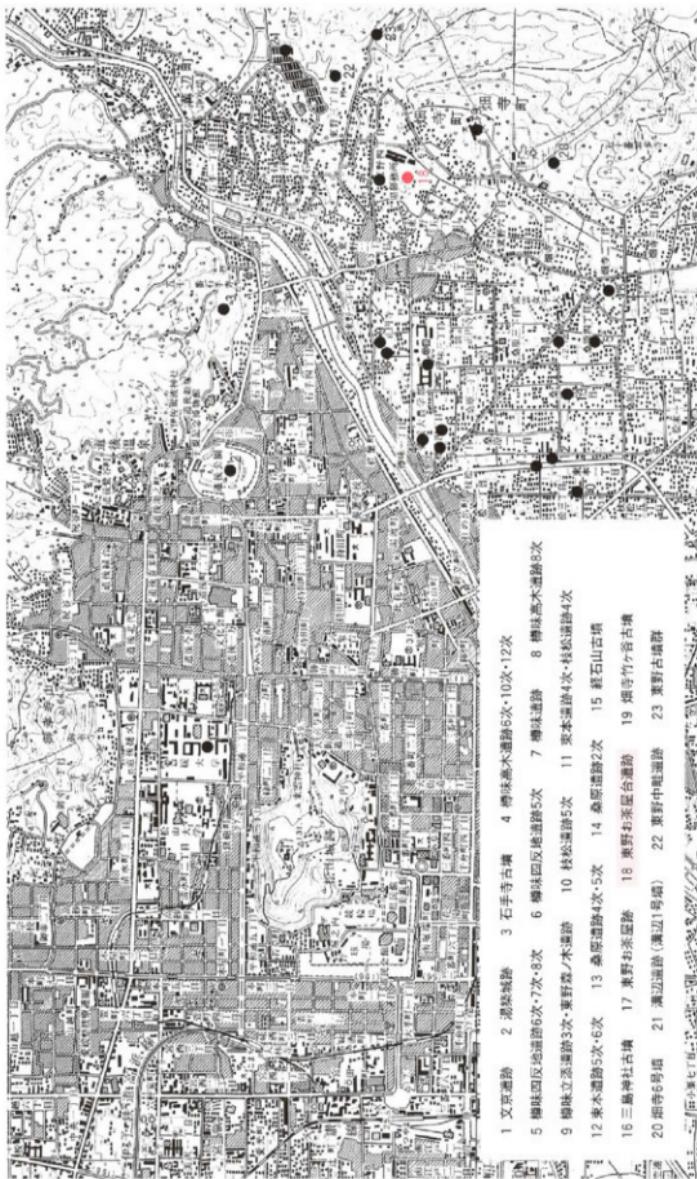
これまで調査地周辺では、松山市東部環状線および松山市道中村桑原線、松山市道樽味溝辺線の道路改良工事や、民間の宅地開発等に伴い、縄文時代から中世にかけての遺跡が確認されている。以下、時代ごとに主要遺跡の概略を記し、特に近隣の遺跡に関しては最後にまとめて記載する。

発掘調査で確認している最も古い時期の痕跡は、松山市東部環状線の道路建設工事に伴って実施された東本遺跡4次調査である。調査ではアカホヤ火山灰及びAT火山灰の堆積を確認し、アカホヤ火山灰の内部よりサヌカイト製の石鎌、アカホヤ火山灰の直下より赤色珪質岩製のナイフ形石器、頁岩製の槍先形尖頭器、石鎌及びスクリイバー等が出土した。

縄文時代の遺跡としては、近年調査された樽味立添遺跡3次調査地において縄文時代晩期の貯蔵穴と考えられる土坑群を検出している。

弥生時代の資料は比較的豊富にあり、特に後期後半以降に遺跡数が増加することが判明している。東部環状線の建設工事に伴って行った東本遺跡4次調査や枝松遺跡4次調査、その後店舗建設や松山市道中村桑原線の道路改良工事に伴って実施した東本遺跡5次調査や同6次調査では、後期から終末にかけての集落址を検出しており、当地域の集落研究に欠かすことのできない貴重な成果が得られている。

古墳時代に関しては、前期初頭頃に廃絶された豪族居館あるいは祭殿と考えられる大型の掘立柱建物が2棟確認された樽味四反地遺跡6次調査地及び同8次調査地を始めとして多くの遺跡が調査され



第1図 周辺道路分布図 (S = 1 : 25,000)

ており、近年市道樽味溝辺線の道路改良工事に伴って実施した樽味四反地遺跡7次調査地や樽味高木遺跡8次調査地では、軟質土器など輪半島系の遺物を伴う中期の住居址、土坑等を確認しており、樽味高木遺跡10次調査地では中期末に属する鍛冶関連遺物の廃棄上坑を確認し、鍛冶行為が行われたことが明らかになっている。

また調査地の近隣には、松山市指定史跡となっている石手寺古墳 第1号・第2号を始めとして、多くの古墳が分布することが知られており、主要なものを以下に列記する。溝辺1号墳は、県営住宅溝辺団地を建設する際に発見された6世紀初め頃の円墳で、横穴式石室と小型の竪穴式石室を内部主体にもつ。東野中畦遺跡は、上水道の配水池を建設する際に調査した遺跡で、火葬骨の納められた古代の上器棺墓や7世紀代の古墳を3基検出している。東野古墳群は、民間の土砂採取に伴って調査した古墳群で、丘陵上より横穴式石室を内部主体にもつ7世紀代の古墳を2基検出している。煙寺竹ヶ谷古墳群は、桑原中学校建設の際に調査した5世紀～6世紀頃の古墳群で、緩やかな丘陵の尾根に沿って直径10mほどの円墳を9基検出しているが、主体部は削平のために失われていた。煙寺6号墳は、医療法人の老人ホーム建設に伴って調査した6世紀初め～前半頃の円墳で、墳丘上からは円筒埴輪の基底部が一部樹立した状態で見つかった。上部部は削平のため消失したと考えられる。経石山古墳は全長約48.5mの前方後円墳で、墳丘部未調査のため正確な時期および主体部の構造は想像の域を出ない。また古墳の周辺では現在までに2度の調査が実施され、後円部にめぐる周溝を確認している。三島神社古墳は、宅地開発のために調査・消滅した6世紀初頭の前方後円墳で、全長45.2m、後円部直径23m、前方部幅20mを測る。主体部に後円部の背後に開口する片袖式の横穴式石室を有し、石室内より滑石製石製品、銀製空玉、金銅製垂飾製品、鉄地金銅張方形革金具、銀製耳環などが出土している。また、石室付属施設として排水溝、墳丘外表施設として前方部に円筒埴輪列を確認している。

古代の遺跡に関しては、樽味四反地遺跡5次調査地より7～8世紀頃の自然流路を検出し、内部より陶硯及び奈良三彩を出土しているほか、樽味高木遺跡6次調査地及び同10次調査地、同12次調査地で検出した8世紀代の土坑及び段落ち構造、溝などから、鉄津、砥石、韁の羽口等の鍛冶関連遺物が確認されている。

中世に関しては、愛媛大学農学部構内に位置する樽味遺跡において14～16世紀の集落関連構造を検出しているほか、桑原遺跡2次調査地において12世紀後半～13世紀頃の土坑及び溝を検出している。また近年調査された東野森ノ木遺跡では12世紀後半～14世紀頃の掘立柱建物跡、溝および中国製白磁四耳壺を埋納した小穴などが見つかっており、桑原遺跡4次調査地、同5次調査地では15～16世紀頃の掘立柱建物跡および炭窯、13世紀～14世紀頃の掘立柱建物跡および溝を確認している。

近世に至ると、良質の瓦土を求めて粘土の採掘を行なうことが、枝松遺跡5次調査地や桑原遺跡5次調査地等で確認されている。また、本格的な調査は実施していないものの、愛媛県の史跡として指定されている東野お茶屋跡は、万治元年(1658年)に松山藩久松家初代藩主松平定行が隠居するために、裏千家千宗安の設計のもと御殿及び庭園の造営を命じたもので、3年を経て寛文元年に完成した。また、周囲一帯を東海道五十三次に見立て、琵琶湖に横したお山池を造り、池の畔には現存する竹のお茶屋跡及び観音堂など様々な草庵、小堂が建てられていたとされる。

これまでに調査地の近隣で実施した発掘調査には、昭和50年代に宅地造成に伴い実施した東野お茶屋台遺跡1次調査地、同2次調査地、同3次調査地、昭和53年に旧愛媛県立果樹試験場内に愛媛県研修所・愛媛農協学園を建設する際に実施した東野お茶屋台遺跡4次調査地(東野遺跡)、平成7年に宅

地開発に伴い実施した東野お茶屋台遺跡5次調査地がある。東野お茶屋台遺跡1次調査地では弥生時代後期の溝を検出しており、同2次調査地では5世紀後半～6世紀中頃の円墳を4基検出している。また、同3次調査地では5世紀末～6世紀前半頃の古墳4基と共に7世紀代の土坑墓1基を確認しており、同4次調査地（東野遺跡）では6世紀前半～後半頃に属する2基の古墳、石組みの水路、満州移民農民隊の兵舎跡等を確認している。同5次調査地では、直径20m前後の円墳および円墳を回り込むようにつけられた、池の排水溝を確認しており、横穴式石室と小型の竪穴式石室を設置して墳丘を築いた後、6世紀末から7世紀初め頃に横穴式石室を壊して新しく別の横穴式石室がつくられたことが判明している。

参考文献

- 1980 松山市教育委員会 「松山市史料集 第1巻 考古編」
- 1987 松山市教育委員会 「松山市史料集 第2巻 考古編Ⅱ」
- 1992 松山市史編集委員会 「松山市史 第1巻 自然 原始 古代 中世」
- 1981 竹内理三 「38 愛媛県」 「角川日本地名大辞典」 角川書店
- 1980 下中直也 「愛媛県の地名」 「日本歴史地名体系 第39巻」 平凡社
- 1996 高尾和長ほか 「東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査」 松山市文化財調査報告書 第54集
- 2001 河野史知 「東本遺跡5次調査地」 「松山市埋蔵文化財調査年報 12」
- 2005 相原清二ほか 「一松山市道中村桑原線関連遺跡一 東本遺跡6次調査地 桑原遺跡2次調査地 桑原遺跡4次調査地」 松山市文化財調査報告書 第105集
- 2003 小玉耶紀子 「樽味四反地遺跡 - 6次調査 - 弥生時代～古墳時代初頭編」 松山市文化財調査報告書 第94集
- 2004 加島次郎 「樽味四反地遺跡8次調査地」 「松山市埋蔵文化財調査年報 16」
- 2004 加島次郎 「樽味四反地遺跡7次調査地」 「松山市埋蔵文化財調査年報 15」
- 2004 高尾和長 「樽味高木遺跡8次調査地」 「松山市埋蔵文化財調査年報 16」
- 2005 松山市教育委員会事務局文化財課 「平成16年度国庫補助事業 市内遺跡発掘調査事業概要報告書」 久米高畠遺跡61次調査・久米高畠遺跡62次調査・久米高畠遺跡63次調査・久米高畠遺跡64次調査・来住庵寺31次調査・樽味高木遺跡10次調査・樽味四反地遺跡10次調査・谷町遺跡2次調査・樽味地区確認調査
- 2003 松山市教育委員会文化財課 「松山の文化財」 松山市教育委員会
- 1979 森光晴 「溝辺遺跡埋蔵文化財調査報告書」 愛媛県教育委員会
- 2001 水本完児 「東野中畦遺跡」 松山市文化財調査報告書 第82集
- 2005 萩田茂敏 「平成17年度 東野古墳群発掘調査概要報告書」 松山市教育委員会／財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 2001 宮内慎一 「第13章 桑原地区的古墳出土史料」「東野中畦遺跡」 松山市文化財調査報告書 第82集
- 1997 河野史知 「桑原地区的遺跡Ⅲ 緑石山古墳2次・枝松5次・樽味高木4次・桑原田中3次・畠寺6号墳」 松山市文化財調査報告書 第58集
- 1992 田城式志ほか 「緑石山古墳」「桑原地区的遺跡」 松山市文化財調査報告書 第26集
- 1972 森光晴/長井教秋ほか 「三島神社古墳」 松山市教育委員会 松山市文化財調査報告書 第1集



第2図 調査地位置図 (S = 1 : 2,500)

- 2002 高尾和長 「樽味四反地遺跡－5次調査－」 松山市文化財調査報告書 第87集
- 2004 河野史知 「樽味高木遺跡5次調査地」 『松山市埋蔵文化財調査年報 15』
- 2005 河野史知 「平成17年度四座補助事業 樽味高木遺跡12次調査地調査概要報告書」 松山市教育委員会／財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 1989 宮本一夫 「鷹子・樽味遺跡の調査」 愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ
- 1993 山崎博之 「樽味遺跡Ⅱ－樽味遺跡2次調査報告－」 愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ
- 1997 田嶋博之 「樽味遺跡Ⅲ－樽味遺跡3次調査報告－」 愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅵ
- 2004 河野史知 「平成15・16年度 市道樽味溝辺線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 東野森ノ木遺跡」 松山市教育委員会／財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 2004 吉岡和哉 「桑原遺跡5次調査地」 松山市文化財調査報告書 第99集
- 1979 阪本安光 「東野遺跡埋蔵文化財調査報告書」 愛媛県教育委員会
- 2002 梅木謙一ほか 「桑原地区の遺跡Ⅳ 桑原木都遺跡・桑原遺跡・桑原小石原遺跡 東野お茶屋台遺跡1次・2次・3次」 松山市文化財調査報告書 第86集
- 1996 橋本雅一 「東野お茶屋台遺跡5次調査地」 『松山市埋蔵文化財調査年報 16』
- 1984 愛媛県史編さん委員会編 「愛媛県史 古代Ⅱ・中世」 愛媛県

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の経過

東野お茶屋台遺跡 6 次測査地は、近年まで愛媛県の果樹試験場として農地利用されていた。しかしながら今回、所有者である文部科学省が土地を民間に売却したことで、分譲宅地として開発されることになり、事前に実施した試掘調査の結果、緊急の発掘調査が必要となった。

発掘調査は、教育委員会が判断を下した「埋蔵文化財の存在する可能性の高い箇所」に関して実施したが、存在しないと判断された箇所に関しては、それと並行して宅地造成に伴う土木工事が実施された。

以下に調査の経過を記す。

平成16年7月16日(金)

まず、調査対象範囲が 2 つに分かれていることから、調査区を 2 箇所(北側より 1 区、2 区)に分けて設定し、調査対象地及び周辺の草刈作業を開始した。また、2 区の南側より重機による掘削を開始した。

同年7月20日(火)

2 区における重機の掘削作業を終了。

同年7月21日(水)～22日(木)

1 区の掘削作業を実施し、2 区の壁面精査作業をはじめとして人力による遺構の検出作業および、重機による掘削痕跡の掘り下げ作業を開始する。

同年8月13日(金)～16日(月)

お盆の為、現場作業は休止。

同年8月30日(月)

台風16号の影響で暴風雨の為、野外調査は中止。

同年9月1日(水)～9月2日(木)

古墳と古墳との間が部分的に浅い谷状になっており、そこに多量の土砂が堆積していることが判明した為に再度重機による掘削作業を実施し、また、人力によって丁寧に遺構の検出作業を行う。

同年9月3日(金)

午前中に遺構の検出作業および清掃作業を完了し、午後より高所作業車を用いて各種カメラで撮影した(大西朋子調査員)。

同年9月6日(月)

検出した遺構の掘り下げを開始。まず、近現代坑や重機による掘削痕跡の掘り下げ作業から作業を開始した。

同年9月7日(火)

台風18号の接近に伴い暴風雨。現場作業は中止とする。

同年9月10日(金)

1区20号墳の調査を開始し、上層図、平面図、断面図等、測量図面の作成および写真撮影等を並行して行いながら、10月4日にはほぼ完了した。

同年9月14日(火)

2区の遺構掘り下げ作業に先立ち、再度遺構検出作業を開始し、作業の完了した場所から順次測量図を作成する。

同年9月29日(水)

台風21号の接近に伴い悪天候の為、野外調査は中止。

同年10月13日(金)

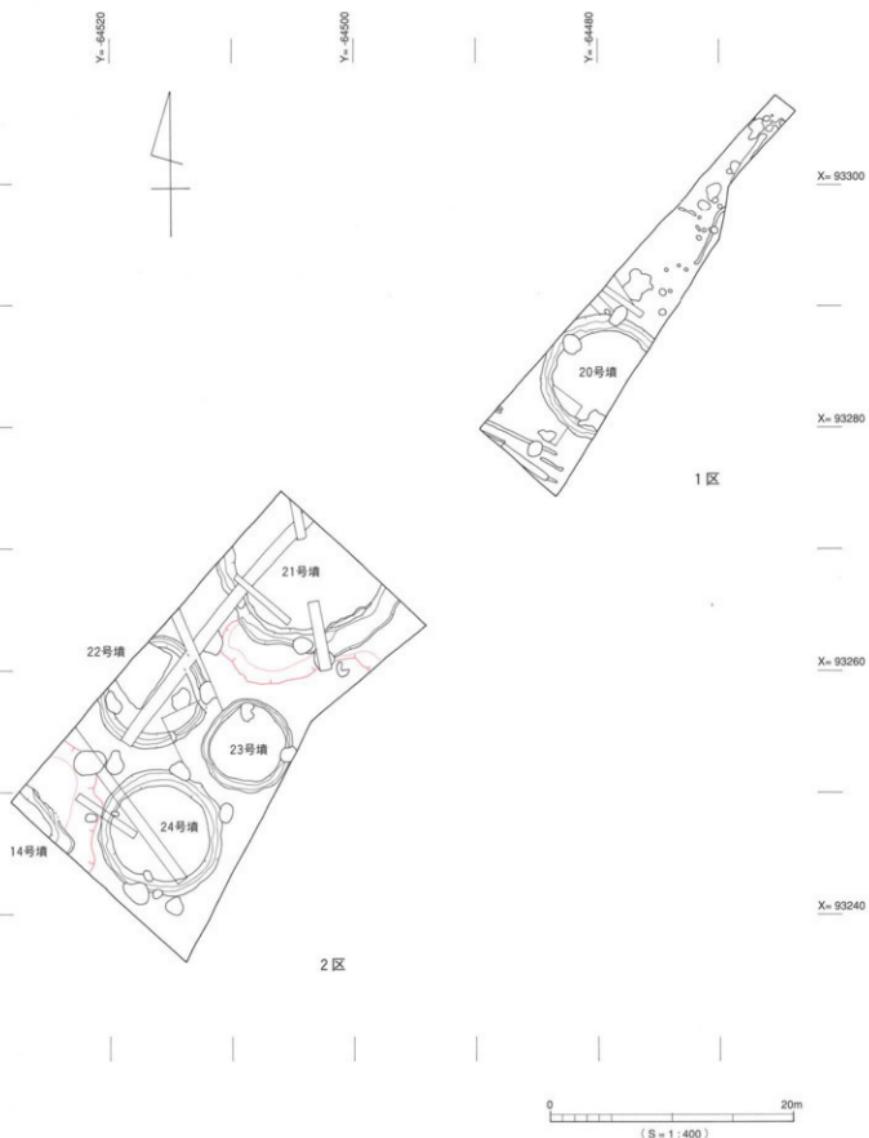
土層図、平面図、断面図等、測量図面の作成および写真撮影等を並行して行いながら、主要遺構を完掘した。

同年10月15日(金)

高所作業車を用いて遺構完掘状況の撮影を実施する（大西調査員）。また撮影の終了後、遺構内部に残しておいた遺物を取り上げ、さらに上層觀察用のベルトを丁寧に取り除くことで現場作業を完了した。

調査期間中、愛媛県地方は台風の直撃を数回受けたが、幸いにも被害はほとんど無く、予定していた期間内で調査を完了することができた。

調査の経過



第3図 造構配置図

2. 調査地の土層

調査地の所在する丘陵は、芝ヶ嶺からびる洪積台地上に位置し、基盤は和泉砂岩疊を含んだ黄橙色系の粘質土である。

調査地の基本土層は、1区：3層、2区：11層に分けることが可能で、1区：第1層は2区：第1層、1区：第3層は2区：第11層に対応する。また特に2区：第5層～第9層は、古墳と古墳との間にあら淺い谷状地形に堆積した流土で、調査区の全城に広がるものではないが、2区：第3層、第4層等と同じ性質を有することから基本上層に加えた。以下、2区の土層を基準に説明を加えるが、古墳時代の遺構は第11層を切り込んだ状態で検出した。

第1層…硬くしまった耕作上で、調査地の全城にみられる。暗灰色硬質土

第2層…平坦な農地として利用する際、低地部に埋められた近現代の造成土で、2区のほぼ全城にみられた。黄橙色粘質土+暗灰色粘質土+黒灰色粘質土

第3層…暗灰色～黒灰色粘質土（中に黄橙色粘質土を混入する）

第4層…暗橙灰色～暗灰色粘質微粒土（中に黄橙色粘質土を混入する）

第5層…21号墳南東部の浅い谷状地形に堆積した流土。暗灰色粘質土+黒灰色粘質土

第6層…21号墳南東部の浅い谷状地形に堆積した流土。暗灰色粘質土

第7層…21号墳南東部の浅い谷状地形に堆積した流土。褐灰色粘質微粒土

第8層…南東部の浅い谷状地形に向かって21号墳の周溝上部に堆積した流土。暗黒灰色微粒土

第9層…第8層と同様に、21号墳の周溝上部に堆積した流土。橙褐色粘質土

第10層…14号墳北側にて検出した谷状地形の最下部に堆積した流土。暗灰色粘質土

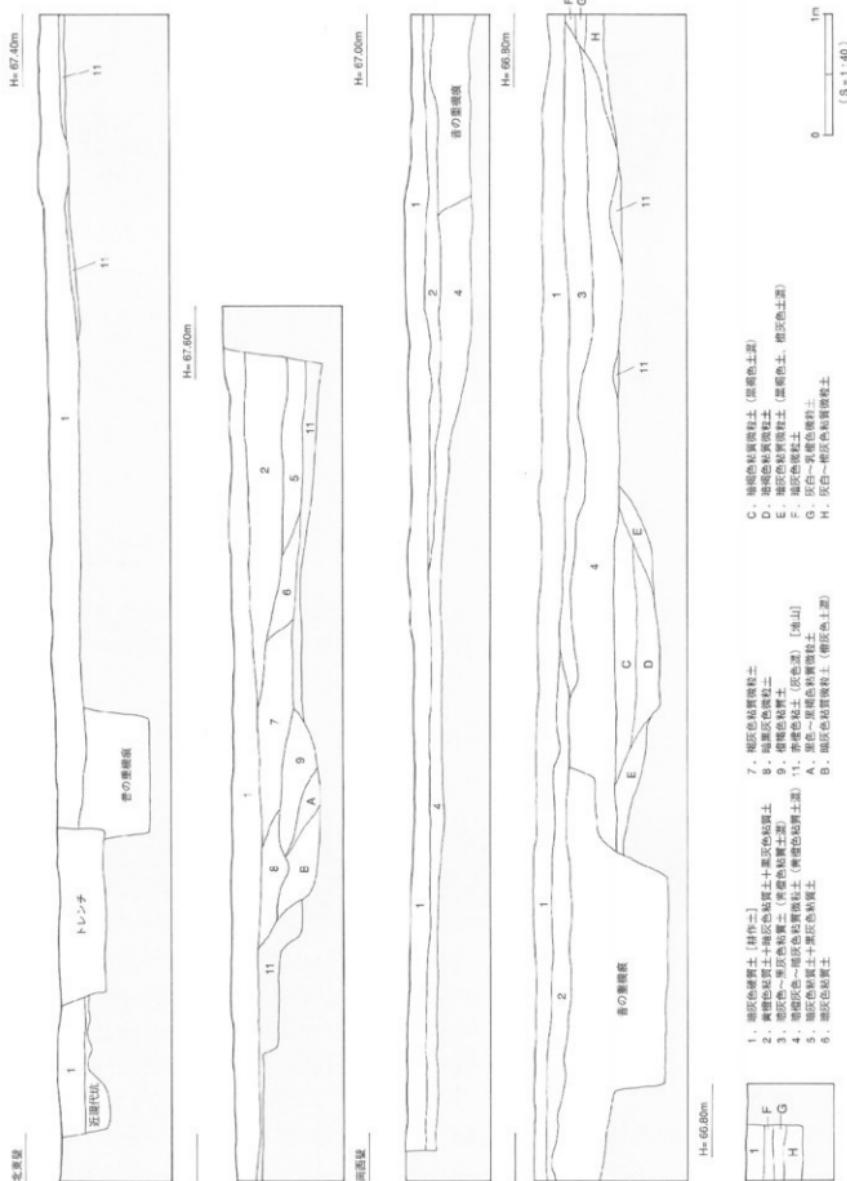
第12層…基盤層（地山）。橙色～赤橙色～黄橙色粘土（灰色混）

調査地の土層



第4図 1区壁面土層測量図

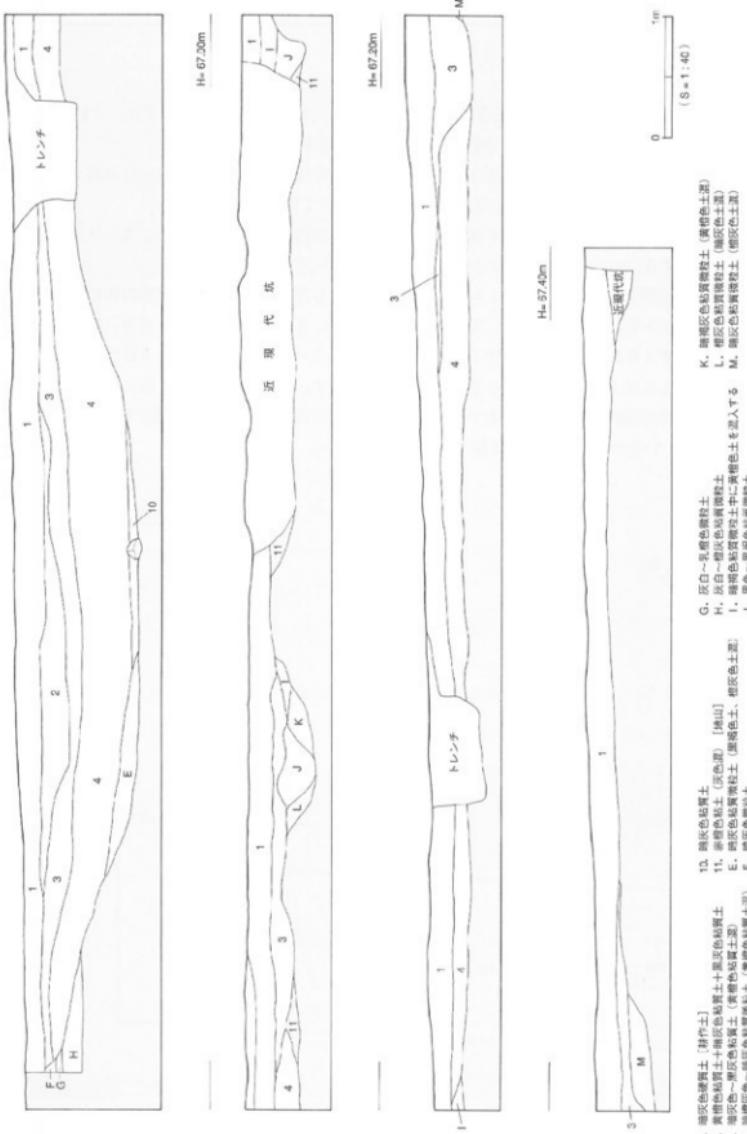
調査の概要



第5圖 2區壁面主層測量圖 (1)

卷之三

H=67.00m



第IV章 遺構と遺物

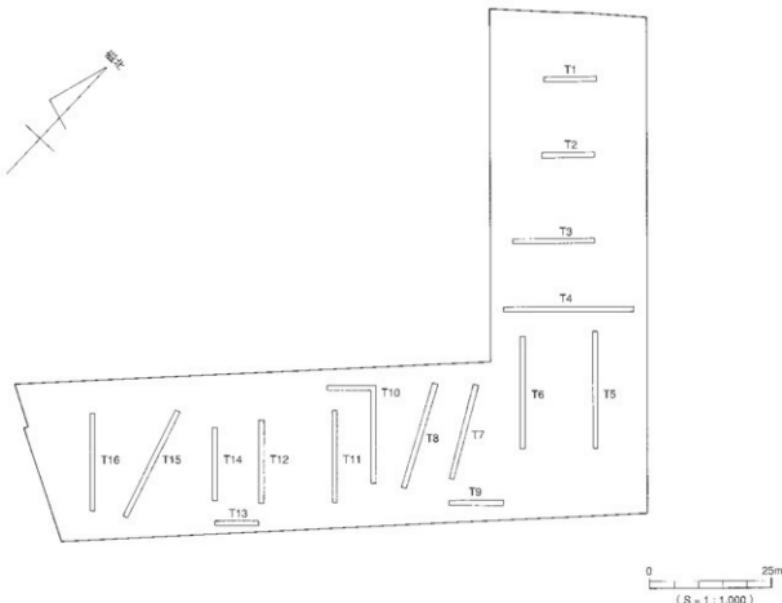
1. 試掘調査（第7図、第8図）

事前に実施した試掘調査では、申請地内に16本のトレントを設定し、T7、T8、T10、T11及びT14～T16において、古墳に伴う可能性の高い溝状遺構を検出した。

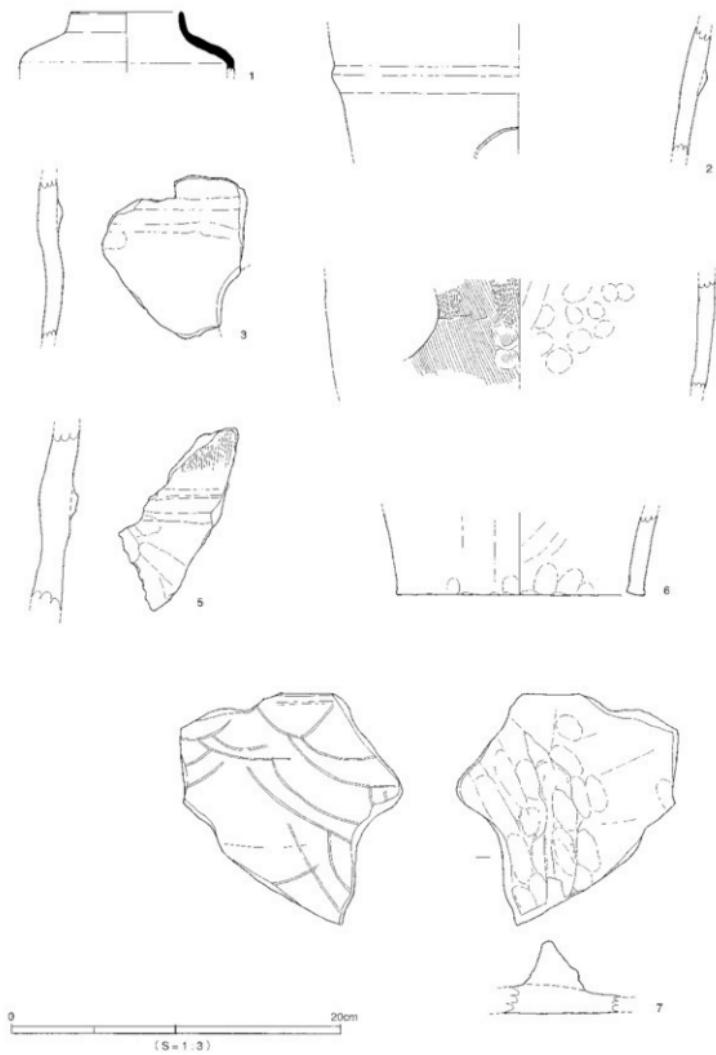
また、遺構の検出できなかった地点においても過去に古墳が存在していた可能性が高く、古墳が完全に削平された結果として若干の土器片を採取することができた。

試掘調査では、主に遺構の確認できなかったトレントの内部から遺物を出土しており、以下に資料として紹介する。

第8図は試掘調査時に設定したトレント内部より出土した遺物で、1は須恵器の短頭壺でT5より出土した。2～6は円筒埴輪で2、3、6は上師質、4、5は須恵質である。また、特に5および6は基底部と考えられ、外面にヘラ状工具痕がみられる。2～4はT5の内部、5はT7の内部、6はT2の内部より出土した。7はT6で出土した器財埴輪で、外面に2本線を一組として直弧文が線刻される。上部に端面が僅かながら水平に遺存する箇所が存在するが、外形を推定するに至らない。その特徴より、いわゆる石見型盾形埴輪である可能性が高い。



第7図 試掘調査トレント配置図



第8図 試掘調査出土遺物実測図

2. 本発掘調査

東野お茶屋台遺跡 6 次調査地における発掘調査の結果、主に古墳時代中期から後期にかけての古墳に伴う周溝を 6 条検出し、その内部および遺物包含層中より弥生時代から中世の遺物が出土した。

(1) 調査地の表土内から出土した遺物（第9図）

第9図に掲載した資料は、重機による掘削の際に調査地の表土から出土した遺物である。

8は1区より出土した遺物である。高坏の环部と脚部の接合部小片で、5世紀後半頃に属する。

9～18は2区より出土した遺物で、9～15および18は2区の南半より出土し、16および17は2区の中央付近で出土した。

9～13は須恵器で5世紀末～6世紀前半頃に属する。9および10は甕の口縁部で、9はやや大型の部類に属する。11は甕の体部で、外面を2条の突帶で区画した内側と上部に列点文を施し、区画の間に円孔を穿つ。12および13は环身で、12は底部下半に静止ヘラ削り調整を加える。

14は弥生土器で甕の底部、15は上崩器甕の口縁部である。

16および17は鉄器である。16は上端が股状に分かれることより鍛先の可能性が高い。17は直刀で、表面には赤色顔料の付着がみられる。

18は外湾刃半月形の石庖丁で、緑色片岩を石材に用いる。

(2) 1区の調査（第10図）

1区では、古墳に伴う周溝を1条検出した。また、他に溝状遺構や、獸骨を多量に含むピット、土坑等を複数検出した。

溝状遺構（S D 1、2、3、4、5、6、7）

S D 1は調査区の北部で検出した溝状遺構で、北東から南西方向にやや蛇行しながらも直線的に掘り込まれる。一部が調査区の壁面で断絶されるが、検出長約12.1m、幅10～42cm、深さ2～14cmを測る。遺構の埋土は、暗灰色硬質土（耕作土）+橙色～赤褐色粘質土（地山）で、調査区の最上面に広がる耕作土を深く開墾した結果形成された遺構である可能性が高い。

S D 2～S D 7はS D 1とほぼ直交する方向（北西から南東方向）にのびる溝状遺構で、S D 1と同様に耕作土と地山が混ざり合った状態のものを埋土にもつ。各遺構の検出長は、S D 2が約1.7m、S D 3が約0.4m、S D 4が約0.5m、S D 5が約6.3m、S D 6が約7.5m、S D 7が約0.8mである。また幅10～30cm、深さ1～11cmを測り、ほぼ並行して刻まれることから、耕作に伴う農耕具の痕跡である可能性が高い。

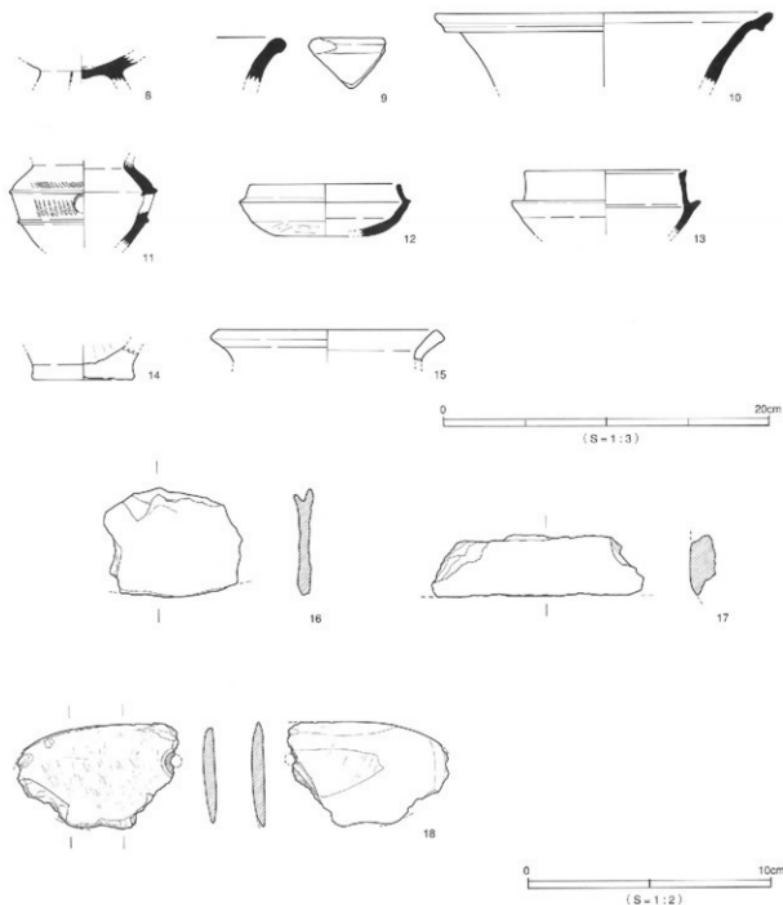
出土遺物はないが、埋土の特徴から近現代に属すると考えられる。

小穴（S P 1～S P 10）

調査区内において、近現代に掘り込まれたと考えられる土坑及び小穴を多数検出したが、これ等のうち内部より多量の獸骨が出土したものがある為、参考までに報告する。

S P 1～10はその内部下層に少量あるいは多量の獸骨が見つかった穴で、調査区の北東部に集中し

本発掘調査・調査地の表土内から出土した遺物



第9図 調査地表土内出土遺物実測図

た状態で検出した。何らかの理由でまとまった数の獣が死亡した後、遺体を一括して埋葬したと考えられ、また火を受けた痕跡はみられなかった。穴の最下層には、獣骨と遺体が腐食した結果形成された土が堆積しており、その上位には地山を掘りおこした際の粘質土、耕作土と地山の混ざった土の順に固く覆われる。

時代を推定できるような遺物の出土は見られなかつたが、S P 4 が S D 1 を掘り込むことから S D 1 よりも新しく、近現代に属すると考えられる。

20号墳（第11図、第13図）

調査区の南西部において検出した古墳で、全体の約3分の2を検出した。周溝の形状および規模等より円墳と判断され、周溝の外側における計測値では、直径が約10.4m、周溝幅0.76~1.47m、深さ0.16~0.53mを測る。また、盛土および盛土の上位に構築されたと考えられる主体部は、後世の開発により削平され確認できなかつた。

周溝の埋土は3層に分けることが可能で、第1層：暗褐色粘質微粒土、第2層：黒褐色～黑色粘質微粒土、第3層：橙灰色粘質微粒土+暗灰色粘質微粒土である。周溝の北側地点より破碎した須恵器が集中して見つかっており、破片を接合した結果、ほぼ完形の状態で多くの個体が復元できた。また、それらのほとんどが周溝の最下面ではなく第2層下位からの出土であることから、周溝が掘削されてある程度期間が経過した後に、何らかの理由で周溝内に落ち込んだ可能性が高い。

出土遺物（第12図）

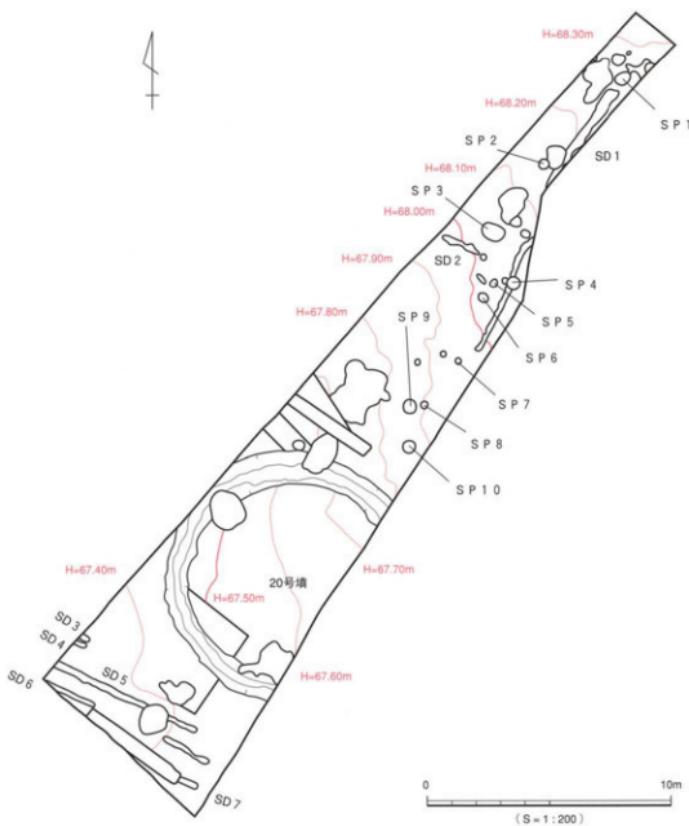
第12図19~29は周溝北部より集中してみつけた須恵器である。

19~22は蓋環の环蓋で、天井部の約3分の2に回転ヘラ削り調整を加える。個体によって細部調整や焼成に違いがみられ、天井部と口縁部とを分かつ枝に關しては、19および21が鋭いのに比べ、20および22の枝はやや丸みを帯びた印象を受ける。口縁端部の段に關しては、19、20、21のものがシャープであるのに対して22は若干丸みを帯びる。焼成に關しては、19→21→20、22の順に焼成の状態が悪い。また特に19に關しては、枝以下の口縁部が器高に占める割合が他と比べて高いことが窺える。

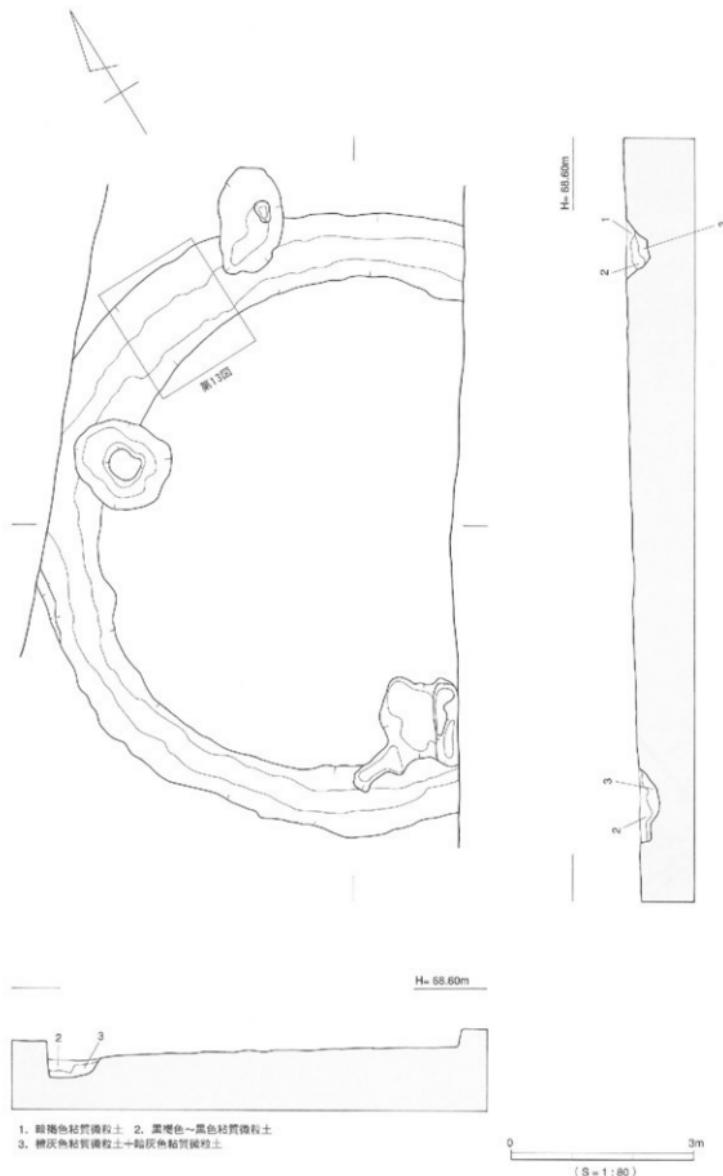
23~27は蓋環の环身で、底部が若干丸みを帯びやや安定性を欠く。底部の外面には回転ヘラ削り調整が施されるが、23および24が底部外面の約3分の2に施すのに対して、25~27は約2分の1に施している。受部の調整に關しては23および24が強くシャープにつまみ出すのに比べ、25~27はやや弱く丸みを帯びている。また23および24は、たちあがりの端部を工具で調整することで内面に鋭い角が形成されているのに対して、26及び27は角がやや鈍く、25に關しては辛うじて角として認識できる程度に丸みを帯びている。また特に23および24に關しては、器高に対するたちあがりの割合が他と比べて高いことが窺える。

28は直口壺で、口頭部の外面に2条の鈍い突帯が巡りその間に波状文が施される。また肩部には2条の凹線がめぐり、その間に刺突列点文が施される。器面調整は丁寧で、内面にはナデ調整、外面にはカキメ調整を施した後に体部下半に丁寧なナデ調整を加えた痕跡が確認できる。また特に、底部内面に鉄製品が貼り付いた痕跡(鉄錆)が環状に見られる。

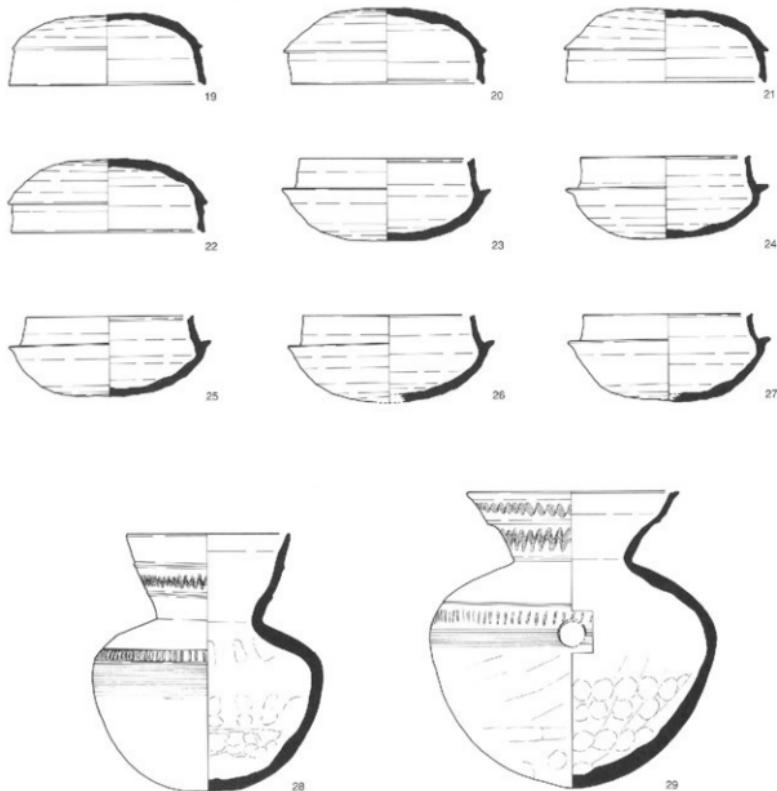
29は大型甕で、口頭部を外反させた後さらに外方へ屈曲させ、屈曲部の上下を強くなることによつて明瞭な凸線を屈曲部に巡らせる。また、口縁部外面および口頭部外面に波状文を巡らせ、肩部に



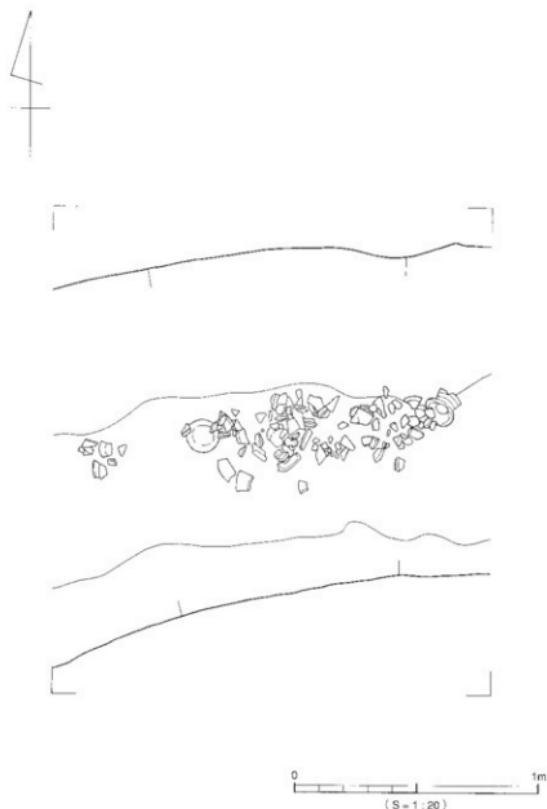
第10図 1区遺構配置図



第11図 20号墳測量図



第12図 20号墳出土遺物実測図



第13図 20号墳周溝内遺物出土状況測量図

2条の凹線をめぐらせた間に刺突列点文を施す。内面の調整は最終的にナデ調整を施すものであるが、底部内面に棒状工具を用いたタタキ様の刺突痕が残り、また体部内面にはわずかながら当て具痕跡がみられる。外面はタタキ調整によって成形した後にカキメ調整を加え、さらに体部の下半に丁寧なナデ調整を施している。

時期 周溝内で出土した遺物は5世紀中頃～末に属すると考えられ、また周溝埋土の堆積状況から判断して5世紀中頃から後半に古墳が築造されたと考えられる。

(3) 2区の調査(第14図)

2区では、5基の古墳に伴う周溝をそれぞれ1条ずつ検出し、周溝内部および周溝上部に流れ落ちた堆積土内より多くの須恵器が出土した。主に近現代の耕作に伴う削平を受け、ほとんどの古墳は墳丘の周囲に掘り込まれた溝のみの検出であるが、14号墳に関しては部分的ではあるが墳丘盛土を確認することができた。また1区と同様に、近現代の耕作によって掘り込まれたと考えられる複数の土坑を確認した。

21号墳(第15図、第17図)

調査区の北部に検出した古墳で、墳丘及び主体部は後世の開発により失われている。古墳の北半部が未検出であるため断言できないが、円墳である可能性が高く、推定直径は約15.9mを測る。

周溝は幅1.3~2.2mを測り、埋土は3層〔第1層：橙褐色粘質土、第2層：黒色~黒褐色粘質微粒土、第3層：暗灰色粘質微粒土(橙灰色土混)〕に分けることができる。

古墳周辺の地形が南西部及び南東部に向かって緩やかに落ち込んでおり、遺物は周溝内部および周溝外側の落込み、それらの上位に堆積する流土内から出土した。

また特に古墳とは直接的な関係はないと考えられるが、周溝の上位に堆積する流土中より複数の土師皿が土鍋に入れられた状態で出土した。

21号墳周溝内出土遺物(第16図)

出土遺物には須恵器の坏蓋、坏身、広口壺、甕があり、それらの特徴より6世紀中頃~後半の特徴を有するものが多い。

第16図30~32は須恵器蓋坏の坏蓋である。

30は口縁端部に一条の凹線を巡らせることで段をつくりだし、天井部に凹線を一条巡らせるこにより形骸化した稜をつくりだしている。また、天井部外面の約3分の2にやや幅広の回転ヘラ削り調整を施す。

31は非常に平らな天井部を有する個体で、全体の約3分の1を欠損する。天井部外面の約3分の2にやや幅広の回転ヘラ削り調整を施し、天井部に細い凹線を巡らせて稜を表現している。また、口縁端部内面に凹線を巡らせるこで段をつくりだしている。

32は他と比べて大型の個体で、口縁端部には内傾する明瞭な段を有する。天井部の約3分の2の範囲に回転ヘラ削り調整を加え、また凹線を巡らせることにより表現された稜は短く鋸さを欠く。

33は須恵器蓋坏の坏身で、たちあがりの約2分の1を欠損する。内傾してたちあがるたちあがりの端部に細い凹線を巡らせるこで段を表現し、また底部外面には全体の約3分の2の範囲に回転ヘラ削り調整を施す。

34は須恵器の広口壺で全体の約2分の1を欠損する。口縁部には丁寧なナデ調整が施され、上下に拡張した口縁端部をはさみ込むように強いナデ調整が施されている。また、体部外面にはタタキ調整の後にカキメ調整を施し、体部内面には同心円状の当て貝痕が残る。

35~37は口縁端部を上方に拡張する須恵器の甕で、体部外面および内面にタタキ調整を施した際のタタキ痕および同心円状の当て貝痕を有する。

35は体部外面に平行タタキの痕跡を有し、口縁部の内外面にはナデ調整を施す。

36及び37は体部外面に格子目状にタタキ調整を施した後、縞状に雜なカキメ調整を施す。36の口縁部外面にはカキメ様の調整痕が残り、また37の口縁部外面には1条の凸線が巡る。

周辺堆積土内出土遺物（第18図、第19図）

第18図38～45は、周溝の上位に堆積する流土中より一括して出土した遺物で、横向きに倒れた上鍋（45）の内部に土師皿が納められた状態で出土した。また、遺物の周囲には特別な掘り込み等は確認されておらず、祭事等で使用された後に一括して廃棄された可能性がある。

38～44は土師皿で、底部を回転糸切により切り離す。底径の口径に対する割合が高いタイプ（38～41）と低いタイプ（42～44）に分けることが可能で、底径の口径に対する割合が高いタイプはさらに、立ちあがりの緩やかなタイプ（38～40）と立ちあがりのきついタイプ（41）に分けることが可能である。

45は土師器の鍋で、内外面共にナデ調整によって仕上げられている。また、内器面に関しては底部付近、外器面に関しては体部下半～口縁部にかけて煤の付着がみられる。器形の特徴より13世紀代に属すると考えられる。

第19図46～58は、21号墳周溝外側の落ち込み内部に堆積する流土内及び流土の上面から掘り込む近現代坑から出土した。

46～52は須恵器の蓋坏で46～49は坏蓋である。

46はやや平らな天井部を有する個体で、天井部外面の約3分の2に幅広の回転ヘラ削り調整を施す。天井部に細い凹線を巡らせることで稜をつくりだし、また口縁端部には内傾する明瞭な段を有する。

47は口縁端部内面に一条の弱い沈線を巡らせるもので、天井部及び口縁部の境に施された凹線も弱々しい。

48及び49は天井部の約3分の2に幅広の回転ヘラ削り調整を施すもので、天井部に一条の細い凹線を巡らせることにより稜を表現している。また、口縁端部内面に一条の細い凹線を巡らせることで段をつくりだしている。

50～52は須恵器蓋坏の坏身で、口縁端部に段を表現しない。また特に50及び51はやや小ぶりな個体で、たちあがりは大きく短い。

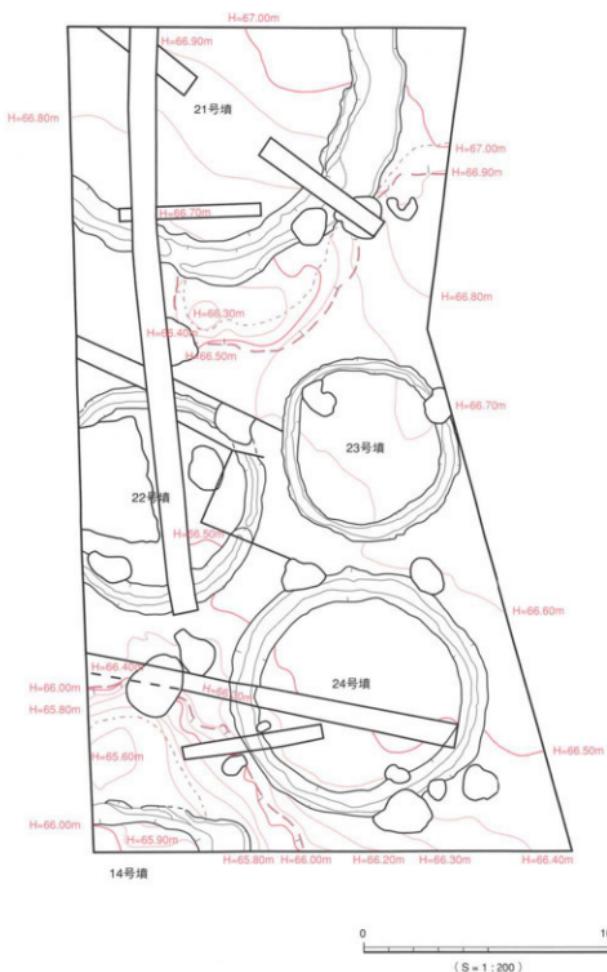
54及び55は須恵器の壺で、胎土、色調、器面調整の方法等より同一個体である可能性が高い。上位に最大径を有する体部からやや太い口頭基部を経て、大きく外反する長い口頭部に至る。口頭部を外反させた後さらに外方へ緩やかに屈曲する口縁部を有し、屈曲部には一条の凹線が施される。口縁端部上面に弱いながらも一条の凹線が施され、また体部の最大径を測る部位よりもやや上位に一条の凹線が施される。

53及び56は須恵器の壺である。

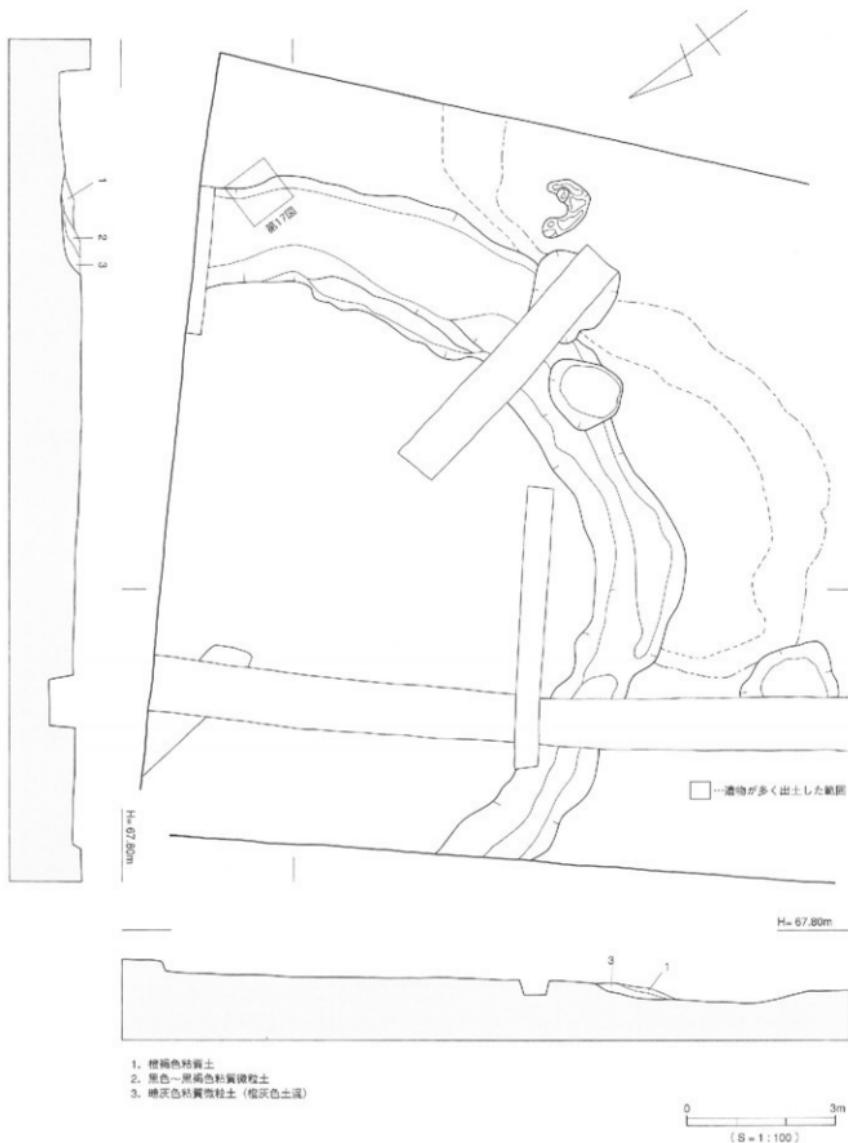
53は破片資料で、口縁端部に強いナデを加えることにより、端部をやや上方に拡張する。口縁直下に1条の凸帶を巡らせ、また口頭部に巡らせた2条の凸帶の間には波状文が施される。

56は口縁端部を丸くねさめる広口壺で、器壁が厚い。器面調整は体部外面にタタキ調整を加えた後に体部上半から口縁部にかけて幅広のカキメ調整を施すもので、特に口縁部外面は工具を用いた縱方向のカキメ様の調整を加えた後に横方向のカキメ調整を施す。内器面の調整は体部上半から口縁部にかけてナデ調整を施し、体部下半の内面には同心円状の当て具痕が残る。

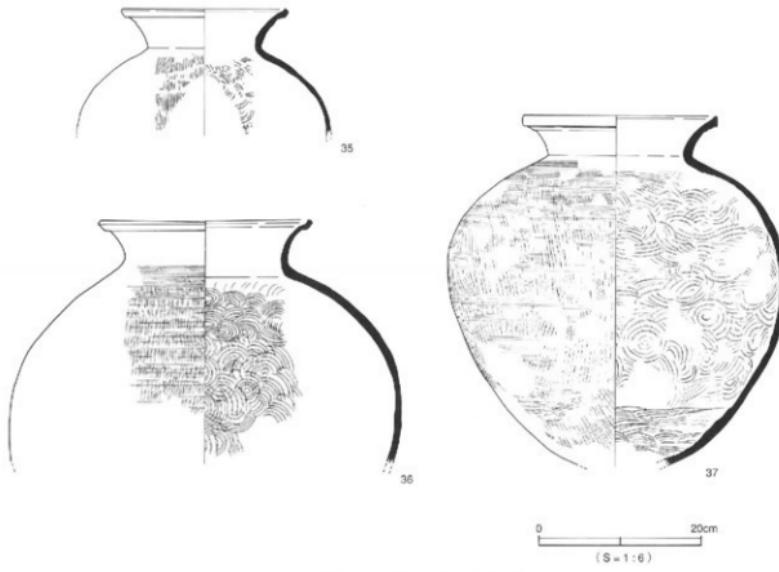
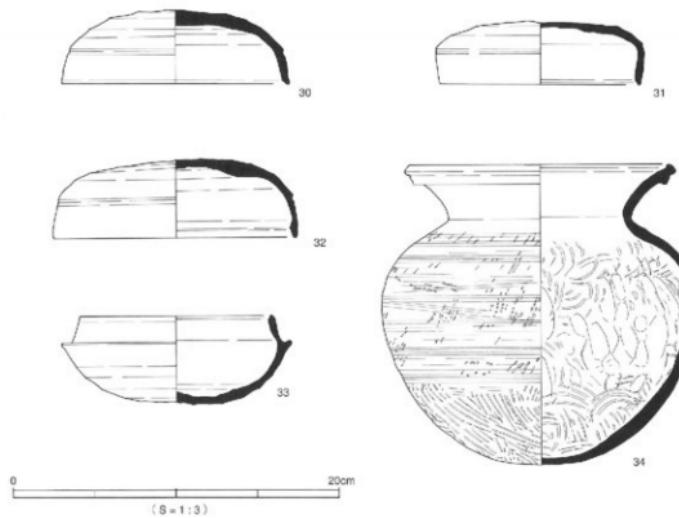
57及び58は須恵器の壺で、体部外面はタタキ調整の後に縞状のカキメ調整を施し、内面には同心円



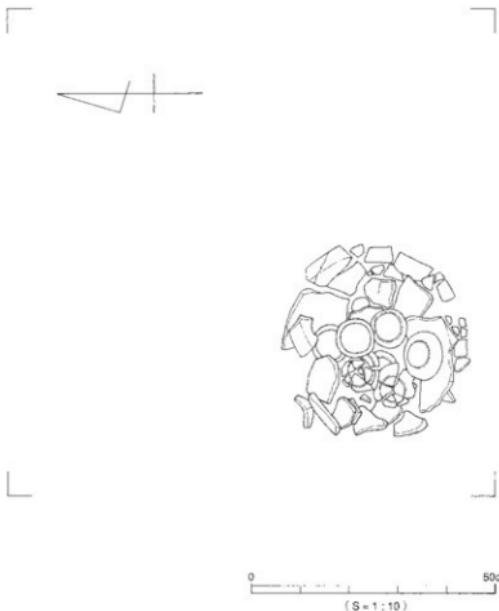
第14図 2区遺構配置図



第15図 21号墳測量図



第16図 21号墳出土遺物実測図



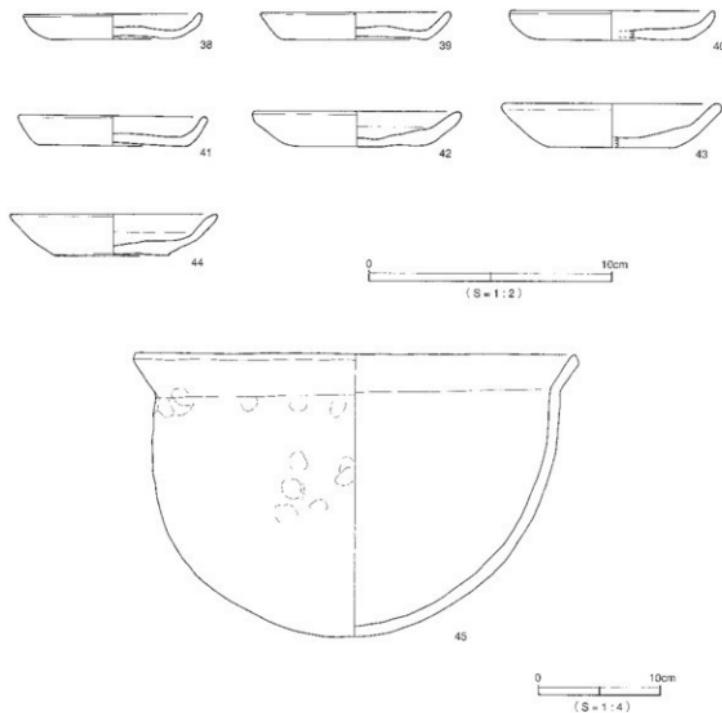
第17図 21号墳堆積土内遺物出土状況測量図

状の当て具痕跡が残る。

57は長胴の体部上半に最大径をもつ個体で、短く直立気味に外反させた口縁部にナデ調整を加えながら端部を丸くおさめている。また、口頭部に「十」のヘラ記号がある。

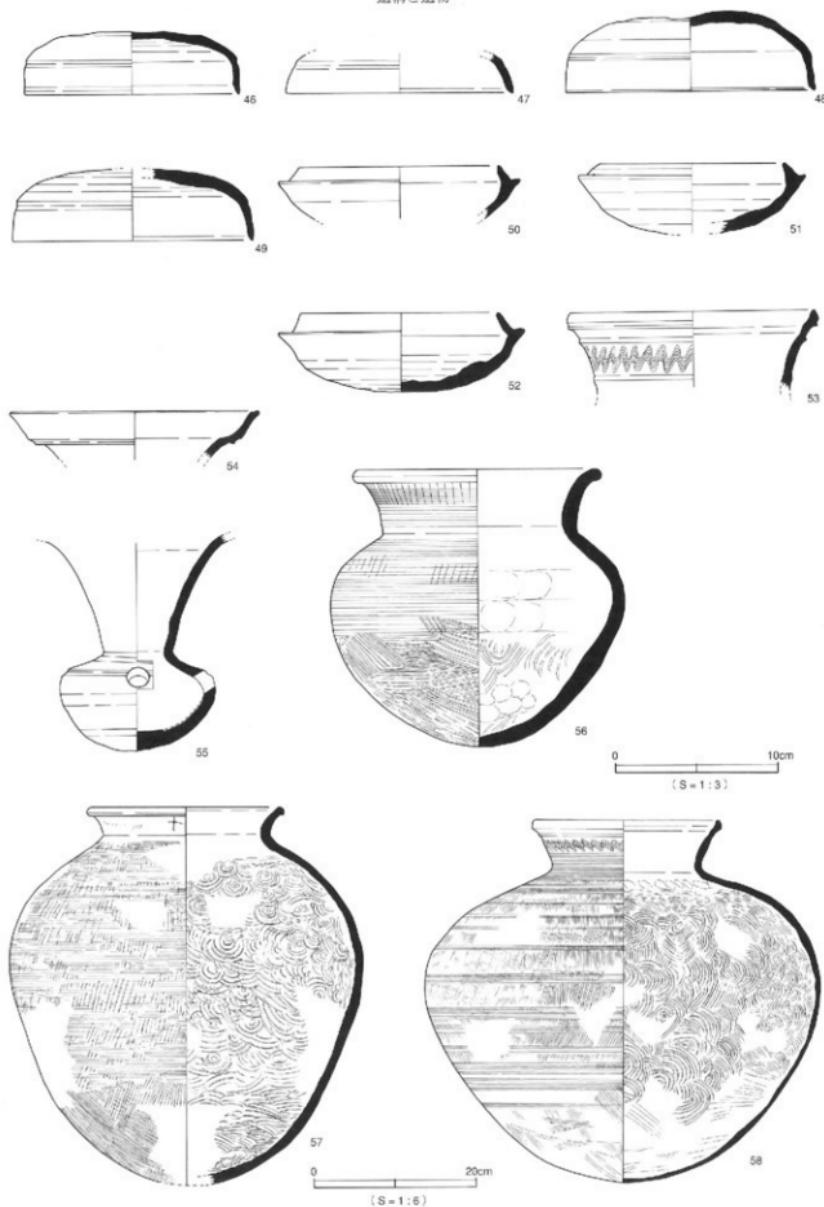
58は大きく肩の張る体部を有し、凸帶および波状文帶を有するやや長めの口縁部が立ち上がる。口縁端部に強いナデを加えながら外面の凸帶をつくりだし、さらに端部を上方に拡張させている。また口縁部にはカキメ調整を行った後に波状文が施され、底部には焼成時に形成された窪みが3箇所配されている。

時期 周辺の堆積内からは中世の上師器や6世紀初頭～末頃の遺物が出土しているが、周溝内出土遺物より6世紀中葉～後半頃の古墳であると考えられる。



第18図 21号墳周辺堆積土内出土遺物実測図（1）

遺構と遺物



第19図 21号墳周辺堆積土内出土遺物実測図(2)

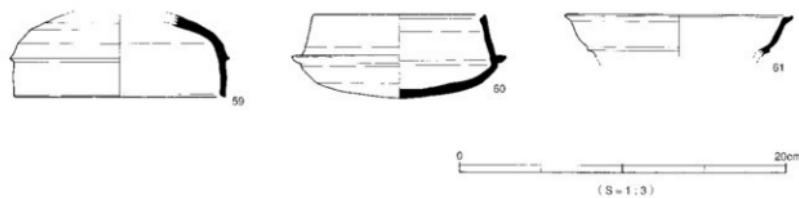
22号墳（第21図）

直径約9.5mを測る円墳で、2区の中央部西側に検出した。近現代の方形土坑および円形土坑、現代に掘られた重機痕跡等の攪乱が多く、調査区の範囲内に古墳全体の約4分の3を検出した。周溝の幅は0.5~1.2mを測り、墳丘及び主体部は後世の開発によって削平され確認できない。周溝の埋土は5層に分けることができ、第1層：暗褐色粘質微粒土(暗灰色土混)、第2層：暗褐色粘質微粒土(第1層より黒い)、第3層：暗褐色粘質微粒土(黄橙色土混)、第4層：黒色~黒褐色粘質微粒土、第5層：暗褐色粘質微粒土(黄橙色土混)である。

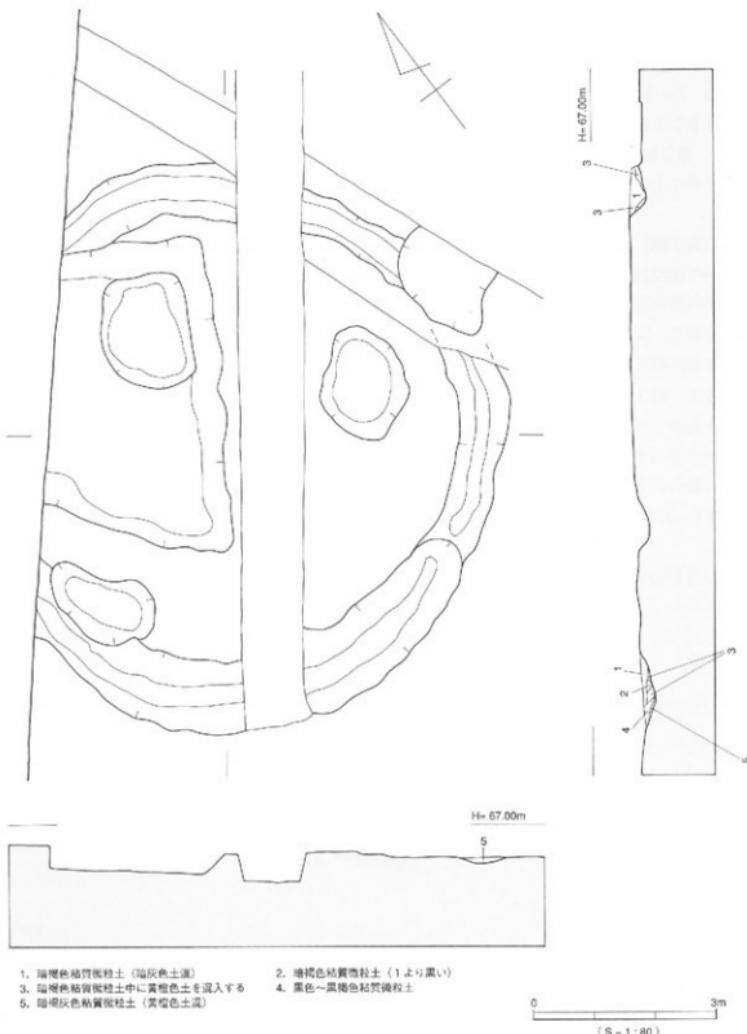
出土遺物（第20図）

第20図59~61は22号墳より出土した遺物で、59は周溝内上層、60及び61は中層から出土した。59は須恵器壺蓋の破片資料で、天井部の約4分の3に丁寧な回転ヘラ削り調整を施すと考えられる。天井部は丸みを帯び、天井部と口縁部を分ける稜は明瞭であるが、やや短く鋸さを欠く。また、口縁端部には緩やかな凹線状のナデが施され、細く内傾する段を行する。60は底部がやや丸みを有する須恵器壺の坯身で、約3分の2の範囲に丁寧な回転ヘラ削り調整が施される。受部は長く外方に突出しており、たちあがりが高い。たちあがりの端部には細い凹線状のナデが施され、内傾する段が表現される。61は須恵器大型壺の口縁端部の小片である。口頭部を外反させた後さらに外方へ屈曲させ、屈曲部の上下に強いナデを加えることによって明瞭ながらやや鈍い凸線を巡らせている。凸線の下位には波状文を施し、口縁端部に凹線状のナデを施すことによって端部を外方に拡張している。

時期 59は5世紀末頃のやや新しい特徴を示すが、60及び61の特徴から5世紀中葉から後半に属すると考えられる。



第20図 22号墳出土遺物実測図



第21図 22号墳測量図

23号墳（第23図）

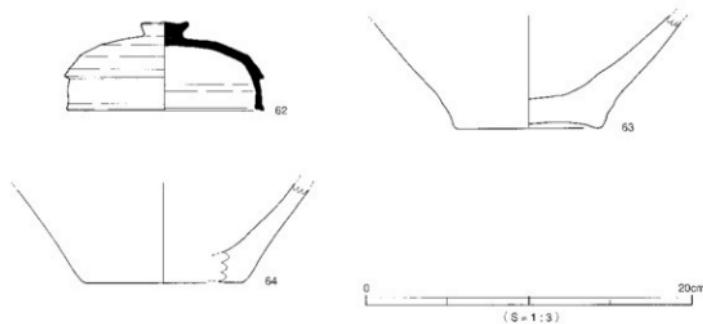
調査区の中央部東側に検出した円墳で、直径が7～7.5mを測る。地形的あるいは位置的な制約を受けた結果、古墳の北西側が丸みを失い直線的になっている。これは古墳を造る際に、北西側に既に存在したと考えられる22号墳を意識した結果である可能性が高い。他の古墳と同様に墳丘及び主体部は開発の為に消滅しており、今回確認したのは幅約0.36～0.9mを測る周溝だけである。周溝の埋土は3層に分けることが可能で、第1層：暗灰色硬質土（黄橙灰色土をブロック状に多く含む）、第2層：黒褐色～黒色粘質微粒土（暗褐色土混）、第3層：暗褐色粘質微粒土（暗灰色土混）である。

出土遺物（第22図）

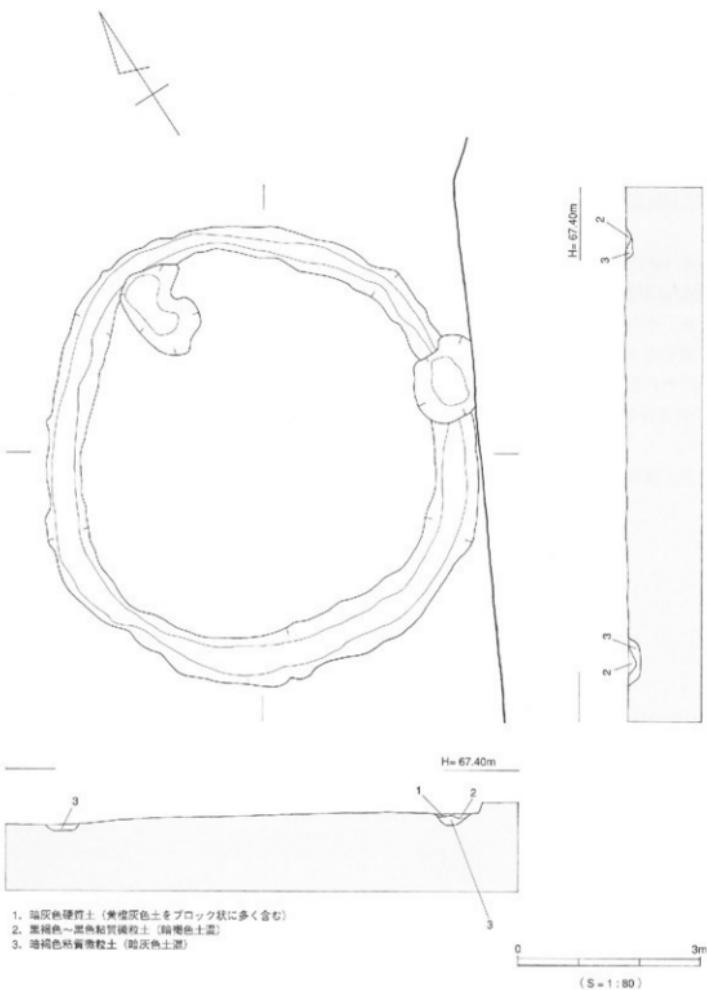
第22図62は須恵器有蓋高杯の蓋で、口縁端部に細い凹線を巡らせることでわずかに内傾する凹面が表現される。やや丸みを帯びた天井部には約3分の2の範囲に回転ヘラ削り調整が施され、また頂部には若干扁平なつまみが付けられる。天井部と口縁部を分ける稜の上位に細い凹線状のナデ、下位にやや太めのナデを加えることにより稜を際立たせようとする意図がみえる。

63及び64は弥生土器の壺底部で、内外面の器面調整は専らのため不詳である。

時期 出土遺物の特徴より当古墳は5世紀後半～末頃に造られた可能性が高い。



第22図 23号墳出土遺物実測図



第23図 23号墳測量図

24号墳（第24図）

直径約10.4m、周溝幅0.8~1.3mを測る円墳で、調査区の南部にて検出した。周溝の埋土は3層に分けられ、第1層：暗灰色~暗褐色粘質微粒土、第2層：黒色~黒褐色粘質微粒土(灰褐色~黄橙色土混)、第3層：暗灰色粘質微粒土(黄橙色土混)である。埴丘及び主体部は後世の開発により消失しており、遺物は周溝の第2層中より須恵器の壺蓋、翫、器台、甕、鉄鎌、弥生上器、姫島産黒曜石などが出土している。また特に、須恵器は比較的まとまった出土状況を示しており、66及び68、69が周溝内北西部より集中して出土した。

出土遺物（第25図）

第25図65~70は周溝埋土内より出土した遺物である。65は弥生上器の壺底部で、底部内面には棒状工具による刺痕痕が多く残る。

66~69は須恵器である。

66は天井部が丸みを帯びた壺蓋の完形品で、大きな欠損は認められない。天井部と口縁部を分ける稜は鋭く、細かな剥落が多くみられる。口縁端部に工具による平坦なナデを加えることで内傾する段をつくりだし、天井部の約3分の2の範囲には丁寧な回転ヘラ削り調整が施される。

67は器台の脚部小片で、残存する範囲内では最上位に長方形のスカシを穿孔し、その下位に刺突列点文、2条の凹線を経て波状文帯を設け、その中に三角形のスカシが穿孔される。

68は大型の翫で口縁部及び胴部の一部を欠損するものの、破片を接合することによりほぼ完形の状態に復元できた。上位に最大径を有するやや球形の体部には外面に丁寧なカキメ調整を施し、その後に体部下半から底部にかけて丁寧なナデ調整を施す。また、体部最大径よりもやや上位に2条の凹線をめぐらせ、その間に刺突列点文が施される。斜めに直線的に立ちあがる口頸部の端部が強く外方に開き、強く外側に張り出す凸線を介して口縁部をさらにつらめ上方に拡張しており、口頸部には波状文が流麗に施されている。また口縁端部に凹線状のナデを施すことにより、上面に段をつくりだしている。

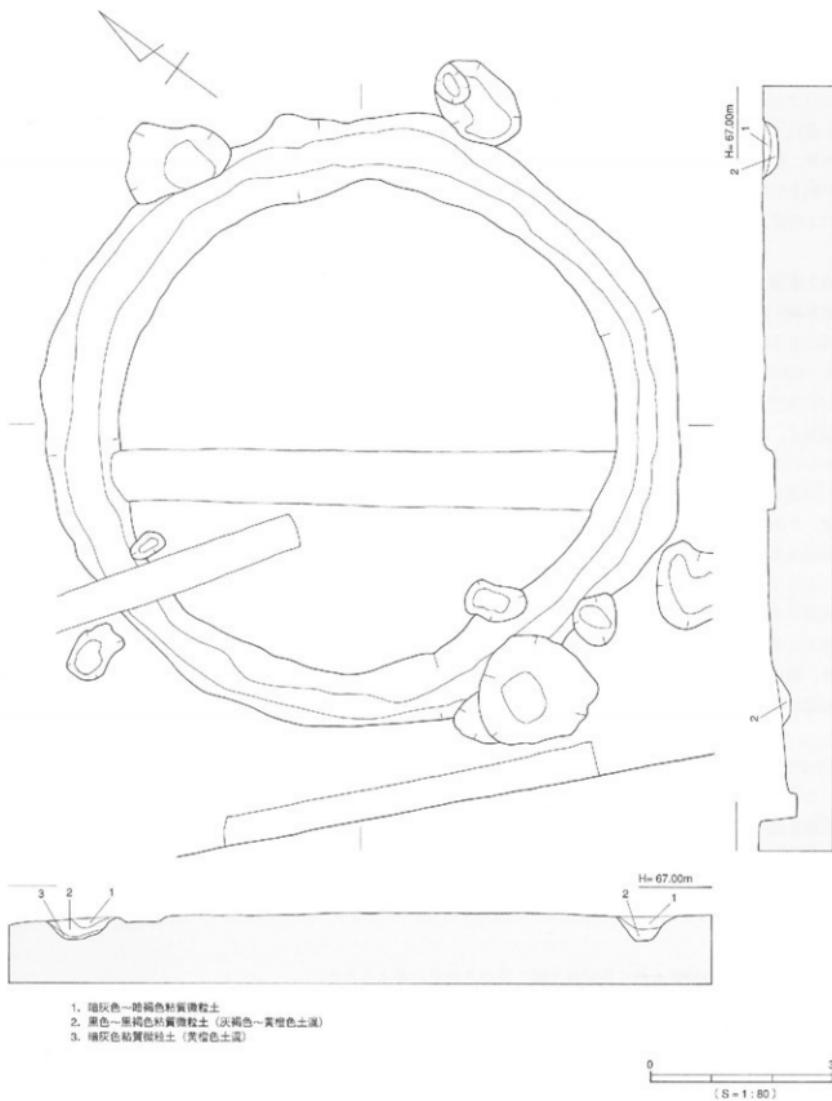
69はやや肩の張った比較的安定感のある体部から口縁部がシャープに外反する壺で、破片を接合することにより全体を復元することができた。口縁端部を上下に鋭く拡張し、また口縁直下に一条の鋭い凸線を施す。体部外面には格子目のタタキ調整痕が残り、その上位には縞状のカキメ調整が施される。体部内面には同心円状の當て具痕が残り、特に底部付近には円形工具で押圧した痕跡がのこる。

70は鉄鎌の茎部で、腐食のため表面がかなり剥落しているが本来は断面形状が方形を呈すると考えられる。

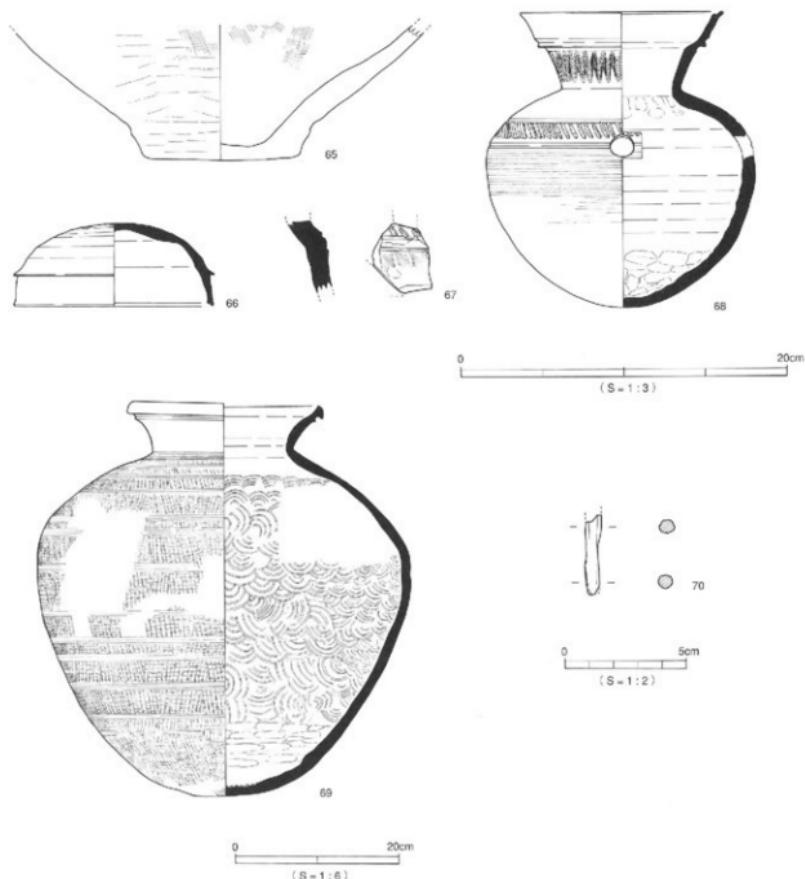
時期 出土遺物の特徴より5世紀後半頃に築造されたと考えられる。

14号墳（第27図）

調査区南西隅に検出した古墳で、検出した位置より1976年に調査した東野お茶屋台遺跡2次調査地で確認している14号墳と同一の古墳である可能性が高い。やや隅丸方形気味に巡る周溝を確認し、東西方向に長い楕円形の円墳或いは長方墳と推定することができる。また、当古墳の北東側から東側に



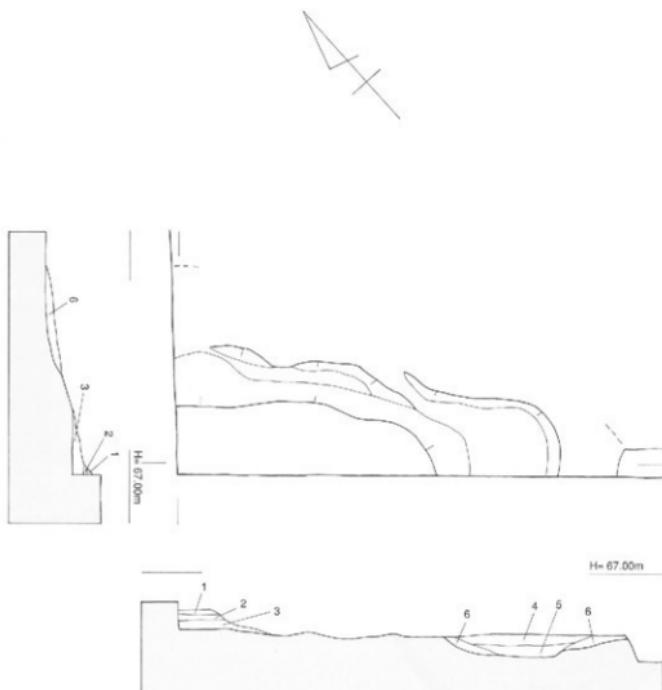
第24図 24号墳測量図



第25図 24号墳出土遺物実測図



第26図 14号墳出土遺物実測図



- | | |
|----------------|--------------------------|
| 1. 黒灰色微粒土 | 4. 鑽褐色粘質微粒土 (黒褐色土面) |
| 2. 灰白～乳白色微粒土 | 5. 鑽褐色粘質微粒土 |
| 3. 灰白～桃灰色粘質微粒土 | 6. 鑽灰色粘質微粒土 (黒褐色土、黒灰色土面) |



第27図 14号墳測量図

位置する22号墳及び24号墳との間に浅い谷状地形を挟むため、周溝の外郭線を明確に検出することができなかった。なお、長方墳とした場合の推定長辺は20m以上を測る。周溝の埋土は3層に分けることが可能で、第1層：暗褐色粘質微粒土（黒褐色土混）、第2層：暗褐色粘質微粒土、第3層：暗灰色粘質微粒土（黒褐色土、橙灰色土混）である。また特にわずかではあるが埴丘の盛土を確認しており、ほぼ水平に堆積した3層の版塗土層がみられた。周溝内より出土した遺物は無いが、谷状地形に流れ落ちた状態で須恵器の瓶、甕の破片が出土した。

出土遺物（第26図）

第26図71は須恵器瓶の頭部である。小片のため詳細は不明であるが、内外面ともナデ調整によって仕上げられている。

時期：出土遺物より6世紀以降に属すると考えられるが、2次調査地における調査成果より6世紀初頭～中葉頃の古墳である可能性が高い。

第V章　まとめ

1. 調査の成果

東野お茶屋台遺跡6次調査地における発掘調査の結果、主に古墳時代中期から後期にかけての古墳に伴う周溝を6条検出し、その内部および遺物包含層中より弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。

古墳時代より古い時代の痕跡としては、弥生時代の人々が生活した証を断片的に確認することができた。弥生時代に属する遺構は確認できなかったが、弥生時代後期の甌および壺、石庖丁、打製石鎌等の出土がみられた。東野お茶屋台遺跡1次、2次、3次、4次調査地でもほぼ同様の成果が得られていることから、かつてこの丘陵上に弥生時代後期の集落が分布していたことは確実で、後世に弥生時代の集落跡を破壊する形で土地利用(古墳の築造など)が行われた結果、集落に伴う遺構はほぼ消滅したと考えられる。

また古墳時代よりも新しい時代の痕跡としては、近現代の耕作に伴う溝状遺構や、獸骨を多量に含むビット、土坑等を複数検出した。しかしながら、これらが近世の史跡東野お茶屋跡と関連をもつ可能性は非常に低く、当地周辺につくられたとされる東野御殿の面影を窺い知ることはできなかった。

古墳時代の遺構としては6基の古墳を確認し、そのうち2次調査で確認していた古墳につながるもののが1基、今回新たに確認した古墳が5基存在する。これまでに東野お茶屋台遺跡では18基^①の古墳を確認していることから、この成果を合わせると丘陵上に23基の古墳が存在することになる^②。

2. 東野お茶屋台遺跡の整理と古墳の位置づけ

東野お茶屋台遺跡が立地する丘陵には、5世紀中頃より7世紀までの墳墓が築造されている。また、丘陵部の大部分を果樹園として利用する為に地面の凹凸部分が緩やかに開墾、削平され、その結果、墳丘および内部土体が失われ墳丘の周囲には大地に刻まれた溝だけが巡っている^③。

以下、東野お茶屋台遺跡で確認している墳墓について整理をおこない、今回の調査で確認した古墳を含め古墳群の位置づけを試みる。(第2図、表1参照)

(1) 東野お茶屋台遺跡に分布する古墳の整理

現在までに確認されている古墳について整理すると、5世紀後半頃に築造されたと考えられるものが16号墳、20号墳、22号墳、23号墳、24号墳、5世紀末～6世紀初頭頃のものが12号墳、13号墳、19号墳、6世紀初頭～中葉のものが9号墳、14号墳、18号墳、6世紀中葉～後半のものが10号墳、21号墳、6世紀後半～7世紀初頭のものが11号墳^④、時期の特定できないものが1～7号墳、15号墳、17号墳である。

墳形は、周溝の形状よりほとんどが円墳であると考えられるが、9号墳及び14号墳は方墳である可能性が高い。また、周溝内より多数の埴輪片を出土していることより墳丘に埴輪を樹立していたと考えられるものが2基(9号墳、18号墳)存在し、特に9号墳からは円筒埴輪とともに盾形埴輪が出土している。土体部が失われている為詳細は不明であるが、周溝内部或いは墳丘の近隣より得られた資料より、古墳には鉄製の直刀や鷹先、鐵鎌および砥石等が副葬されていたことが窺え、また須恵器の器

台を出土している古墳（9号墳、10号墳、13号墳、14号墳、17号墳、18号墳、24号墳）が比較的に多い。

以下、古墳時代に属する墳墓の特徴を時期ごとに概観する。

① 5世紀中頃～後半（16号墳、20号墳、22号墳、23号墳、24号墳）

古墳は全て小型の円墳で、直径が7mから10m強を測る。北西部が未検出の22号墳および、北～東部が未検出である16号墳に関しては未確認である為実証不可能であるが、20号墳及び24号墳に関しては、周溝の北～北西側に完形或いは完形の状態に復元できる須恵器が集中して出土することから、意図的に祭祀的な行為がおこなわれた可能性が高い。

② 5世紀末～6世紀初頭（12号墳、13号墳、19号墳）

10m～16mを測るやや小型の円墳で、墳形の違いに変化は見られないものの前段階よりも少しだけ規模が大きくなる傾向がみられる。19号墳では周溝の南側で完形或いは完形の状態に復元できる須恵器が集中して出土している。また特に、3次調査地においてこの段階の古墳（19号墳）と前段階の古墳（16号墳）が切り合った状態で確認されているが、墳頂あるいは周溝部分が重なるのみで特別大きな意図はなかったものと考えられる。

③ 6世紀初頭～中葉（9号墳、14号墳、18号墳）

前段階に引き続き墳丘径の大型化が進行し、古墳の規模が20m前後を測るのに加え突如として（長）方墳が出現し、また墳丘上に円筒埴輪を樹立したと考えられる古墳が現れる。古墳の形態と円筒埴輪の樹立には関連性はみられないが⁶⁵、ほぼ同時期に出現することから考えてこの時期に当丘陵を墓域とする集団の生活に何らかの大きな画期があったことが窺える。また試掘調査時に1区の北方より円筒埴輪及び石見型盾形埴輪が出土していること等から、今は無き6世紀前半頃の古墳の存在が想定できる。

④ 6世紀中葉～後半（10号墳、21号墳）

2基のみの確認であるため詳細な検討を加えることができないが、これまでのところ円筒埴輪の樹立は確認できない。墳形は円墳のみが確認されており、また墳丘規模に関しては前段階とほとんど変わらないようである。削平のため主体部の内容も判明しておらず、また事例が少ない為、この段階で方墳の築造及び円筒埴輪の樹立が消滅するか否かは不明確である。

⑤ 6世紀後半～（11号墳）

1基のみの確認であるが、主部に横穴系の埋葬施設が採用されることが判明している。墳丘および石室の構築方法、石室構造の変遷等に関しては報告書の刊行を待たなければならないが、東野お茶屋台遺跡の中で唯一内部主体が明確にされた古墳であり、横穴式石室および小型の竪穴式石室を内部主体とする古墳を築いた後、6世紀末から7世紀初め頃に横穴式石室の一部を壊して構造の異なる新しい横穴式石室がつくられる⁶⁶。

⑥ 7世紀代

墳丘を伴わない土坑墓（3次調査地、SK8）を確認している。

（2）古墳を築造した集団の性格と画期の背景

以上、東野お茶屋台遺跡における古墳時代の墳墓を時期別に概観し、その結果5世紀中頃以降古墳時代を通じて丘陵全体が墓域として利用されたことが判明した。また、同時に再検討しなければならない問題が浮上し、それは5世紀中頃～後半に古墳の築造を開始した集団の性格と6世紀初頭～中葉段階

に発生したと考えられる画期の背景、6世紀末に行われる石室の破壊行為である。

以下、桑原地区における古墳時代中期以前の状況を整理し、集団の性格を考えた上で画期の背景について検討を加える。

①桑原地区における集落の展開と古墳を築造した集団の性格

東野お茶屋台遺跡の所在する桑原地区では、現在までのところ樽味立添遺跡で確認している弥生時代前期末から中期初頭の環濠をともなう集落の存在を皮切りに、弥生時代後期以降、東本遺跡や釜ノ口遺跡のように破鏡および豊富な鉄器を所有する挺点的な集落が展開し、古墳時代初頭に至ると樽味四反地遺跡の中に居館あるいは祭殿と呼ぶに値する巨大掘立柱建物が出現する。また古墳時代中期前半に至ると樽味高木遺跡や樽味四反地遺跡などに渡来系の文化を保有する現象がみられるようになり、古墳時代中期末には樽味高木遺跡において鍛冶行為が行われたことがほぼ確実になっている。

以上のように弥生時代から集落造営の好適地となった桑原地区では、古墳時代中期に至るまで集落としてほぼ継続した土地利用がおこなわれ、そのような中で柔軟に外来文化を取り入れながら発展した有力集団の墓域として古墳群は築かれたと考えられる。また古墳の被葬者としては、これまでのところ古墳時代前期から中期に属する地域全体の首長あるいは豪族となるような人の墓は明確にされていないが、それを補佐する役割を担った一集団のリーダーを想定することができる。

②6世紀初頭から中葉にみられる画期の背景

桑原地区では、樽味四反地遺跡や樽味高木遺跡等において他の時代同様、古墳時代後期の住居址が多く検出されているが、これまでのところ5世紀末あるいは6世紀初頭一中葉の集落を取り巻く生活環境に特別な変化があったとは考えられず、またこの地区に埴輪の生産および流通に関わる集団が存在したという確証もない。因って、現時点ではこれまでの通説に従って円筒埴輪は砥部川流域の窯業集団によって供給されたと考えるのが適当であると思われ、これを前提として両地域の共通点を抽出し、それにより画期の背景を導き出す。

両地域の共通点としては、まず東野お茶屋台遺跡5次調査地・11号墳で確認した『石室を破壊した後に新たなる石室を構築する行為』が砥部川流域で複数例確認されていることが挙げられ、その事例としては土壇原古墳群・土壇原9号墳の「横穴式石室を破壊した後改めて横穴式石室を構築」する行為および大下田古墳群・大下田4号墳の「開口方向の異なる石室を破壊・埋め戻しを行った後に二石室を構築」する行為⁹⁷が知られる。

また砥部川流域は弥生時代以降、方形周溝墓からの伝統を受け継いだ墓制が展開し、古墳時代後期に至っても一定量の方墳が築造されるなど墳墓の在来形態が方形であることが知られ、東野お茶屋台遺跡における方墳の出現に何らかの影響を与えた可能性は十分に考えられる。

さて、ここで松山平野における4世紀末～5世紀代の古墳群における前方後円形以外の墳丘形態を概観すると、北東部の桑原地区では東野お茶屋台遺跡及び畠寺竹ヶ谷古墳群にみられるように円形の墳丘形態を探るが、北部の太山寺山塊周辺では高月山古墳群及び鶴ヶ峰古墳群などに円墳と方墳が混在する状況がみられ、また平野中央の東山丘陵では東山古墳群のごとく方形の墳丘形態を採用することが判明しており、方墳の出現が一概に砥部川流域の影響であるとは言い切れない。

しかしながら、東野お茶屋台遺跡内の古墳と砥部川流域の古墳との間に複数の共通点を見出すことができるのも事実であり、またこれらが単なる偶然の所産であるとは考え難く⁹⁸、したがって6世紀初頭から中葉にみられる画期の背景としては、東野お茶屋台遺跡に墳墓を築いた集団と砥部川流域の

集団、或いはそれを含めた他集団との交流が活発になったことが考えられ、その結果として共通の文化行為がとられた可能性が高い。

6世紀初頭から中葉にかけて古墳の規模が増大し、様々な墳丘の形態を取り入れながら墳丘上に円筒埴輪を立ち並べることが可能となるに至った背景には集団の有する勢力の増大が考えられるが、この追求は今後の課題としたい。なむ、石室の破壊行為をもたらした外的あるいは内的要因に関しては現段階で言及することは不可能で、今後調査事例の増加に伴って積み重ねられる資料によって判明していくものと考えられる。

以上、東野お茶屋台遺跡におけるこれまでの発掘調査成果を整理し、一試論として古墳群の被葬者像と古墳群の展開について検討を加えた。この中にはこれから発掘調査によって置される内容が少なからず含まれていると考えられるが、今後注意を払うべき調査視点および研究方法を提示することで最後のまとめに変えさせていただきたい。

※1、19号墳まで付与されているが、東野お茶屋台遺跡5次調査地における調査の結果、8号墳は古墳であることが不明確となる。なお1号墳および7号墳に関しては未確定であるが数に含めた。

※2、しかしながら実際には近世及び近現代の開発行為の結果、完全に消滅してしまった古墳も多数あると考えられ。このことは今回調査対象にならなかったが、試掘調査時に設定したトレーンチ内から出土した埴輪片から推定することができる。

※3、谷状地形を利用しながら造ったと考えられる「お山池」の周囲に限っては事情が異なり、墳丘が良好な状態で現在も遺存していると考えられる。そのことは、東野お茶屋台遺跡5次調査地で得られた所見より強く裏付けることができるが、欠番となった8号墳のように近世の庭園を造営する際に新たに盛り上げられたものが含まれる可能性もある。

※4、11号墳の年代は報告書未刊行の為不確定であるが、第2石室を破壊する第1石室の床面から出土した須恵器の年代が6世紀末～7世紀初頭とされることより推定した。

※5、円墳である可能性の高い18号墳の周溝内からも多量の埴輪片が出土していることから、少なくとも当古墳群内における関連性はないと判断した。

※6、玄室に至るまでの墓道位置にほとんど変更が見られることや、破壊行為が墳丘あるいは石室の全体に及ぶ徹底的なものではないことより、外部の集団による破壊行為とみるにはやや疑問が残るが、当丘陵を墓域とする集団の生活になんらかの変化があったことは十分に考えられる。重要な社会情勢が背景にあると考えられるが、東野お茶屋台遺跡内では1基のみの確認かつ未報告である為、調査事例の増加を期待して今回は分析の対象にしなかった。

※7、岡田敏彦 2004 「祇部川流域の古墳における断層性について 一古墳群概説ー」「紀要愛媛」第4号 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター による。また、岡田氏は「愛媛県における首長墳索描」「紀要愛媛」第2号において大下山古墳群内の4号墳の状況について「この異変（前段階で築造された古墳を破壊して新たな古墳を築造する事態）を考えたとき、集団内の首長系列の移動だけではなく、より大きな要因（既存集団外からの首長の派遣）も有りうるのではないか」と推定している。

※8、浜平野的な出来事である可能性も棄てきれず、検討の余地をのこす。

表1 東野古茶屋台遺跡 古墳時代墳墓一覧

古墳名称	時期	形状	規模	埴輪	器台	主体感	備考
1号墳	未調査						
2号墳	未調査						
3号墳	未調査						
4号墳	未調査						
5号墳	未調査						
6号墳	未調査						
7号墳	未調査						
8号墳	未確定						
9号墳	6初～中	方?	15+a(長辺)	円筒、盾	○		
10号墳	6中～後	円	17+a		○	石室?	
11号墳	6後～7初	円	20+a			横穴式石室／小豎穴	
12号墳	5末～6初	円	10			横穴式石室→廳穴式石室	
13号墳	5末～6初	円	16	○			
14号墳	6初～中	方?	20+a(長辺)		○		
15号墳	不明	円?	13			土坑?	
16号墳	5後	円?	10				全面未検出、出土遺物なし
17号墳	不明	円	9.4		○		
18号墳	6初～中	円?	19				
19号墳	5末～6初	円?	16				
20号墳	5後	円?	10.4				
21号墳	6中～後	円?	15.9				
22号墳	5後	円?	9.5				
23号墳	5後	円	7.5				
24号墳	5後	円	10.4	○			
3次調査SK8	7	上坑	2×0.8			上坑蓋?	
							周溝内祭祀
							完形の环身2

遺 物 觀 察 表

表2 試掘調査 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (内面)	胎土 (内面)	備考	図版
				外面	内面				
1	短頸瓶	口径(6.6) 残高3.7	須恵器。内傾する口縁部。	国転ナデ	回転ナデ	灰黄色	石・長(1) ○	外面に軸寸着	
2	円筒埴輪	残高8.0	外彎しながら直線的に伸びる。体部 にタガを一条、内孔を施す。	摩滅	摩滅	明黄褐色	石・長(1~3) ○		11
3	円筒埴輪	残高9.8	小片。タガ1条と円孔を施す。	摩滅	摩滅	明黄褐色	石・長(1~2) ○		11
4	円筒埴輪	残高6.7	須恵質。円孔を施す。	ハケ(8本/cm)	ナデ(指頭鉗)	灰色	石・長(1~2) ○		11
5	円筒埴輪	残高11.0	須恵質。基底部。	ハケ(8本/cm) ヘラ状工具	ナデ(指頭鉗)	灰色	石・長(1~2) ○		11
6	円筒埴輪	底径(15.0) 残高5.0	基底部。	ナデ(指頭鉗) ヘラ状工具	ナデ(指頭鉗)	[に]ぶい黄橙色 [に]ぶい黄橙色	石・長(1) ○		11
7	盾形埴輪	残高14.2	石見型盾形埴輪。外面に直弦文の線 刻を施す。	ナデ(指頭鉗)	ナデ(指頭鉗)	明黄褐色	石・長(1~4) ○		11

表3 調査地表土内 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・筆文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
8	高杯	残高1.6	基部の小片。スカシを施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰赤	密	○	
9	甕	残高2.8	外反する口縁部。端部は丸みをもつ。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒色 灰色	密・石・長(1~2)	○	
10	甕	口径(20.6) 残高4.5	外反する口縁部は上方につまみ出す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰オリーブ色	密・石・長(1~3)	○	
11	瓶	体測径(9.0) 残高5.3	小型の体部。2条の尖骨の間および上部に刺突点文を施す。径1.2cm 穿孔。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密・長(1)	○	
12	环身	口径(9.2) 残高3.2	短くのびる受部。たちあがりは短く外反気味に内傾する。	口・回転ナデ 底・静止・ヘケア	回転ナデ	浅黄色 浅黄色	密・石・長(1)	○	
13	环身	口径(9.8) 残高3.9	外上方にのびる受部。たちあがりは直立し、端部は凹む。	口・回転ナデ 底・回転・ヘケア	回転ナデ	灰色 灰色	密・粒 ○		
14	甕	底径(6.0) 残高2.1	弔生土器。平底。	ナデ	ナデ	橙色 に赤い黄色	石(1~3)	○	
15	甕	口径(13.4) 残高2.0	口縁端部は「コ」の字状。	ヨコナデ	ナデ	浅黄色 浅黄色	石・長(1)	○	

表4 20号墳 出土遺物觀察表 土製品 (No.1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
19	环盖	口径12.0 器高4.4	天井部と口縁部を分ける棱および口縁端部の段は無い。口縁部が器高に占める割合が高い。	天・回転ハサカ20 口・回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰褐色	石・長(1) ◎		12
20	环盖	口径11.8 器高4.6	棱はやや丸みを帯びる。口縁端部の段は無い。	天・回転ハサカ20 口・回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密・石・長(1~2) ◎		12
21	环盖	口径12.2 器高4.5	棱および口縁端部の段は無い。	天・回転ハサカ20 口・回転ナデ	回転ナデ	灰色・灰オリーブ色 灰褐色	石・長(1~2) ◎		12
22	环盖	口径11.8 器高4.5	棱および口縁端部の段がやや丸みを帯びている。	天・回転ハサカ20 口・回転ナデ	回転ナデ	灰色・灰オリーブ色 灰褐色	石・長(1~3) ◎		12
23	环身	口径(10.6) 器高5.1	底部がやや丸みを帯びる。受部の突出が鋭く、たちあがりの端部内面に鋭い角がみられる。	口・回転ナデ 底・回転ハサカ20	回転ナデ	灰色・灰オリーブ色 灰褐色	密・砂 ◎		12
24	环身	口径10.4 器高5.0	底部がやや丸みを帯びる。受部の突出が鋭く、たちあがりの端部内面に鋭い角がみられる。	口・回転ナデ 底・回転ハサカ20	回転ナデ	灰色・灰オリーブ色 灰褐色	密・石・長(1~3) ◎		12
25	环身	口径10.3 器高4.9	底部がやや丸みを帯びる。受部および、たちあがりの端部内面はやや丸みを帯びる。	口・回転ナデ 底・回転ハサカ20	回転ナデ	灰色・灰オリーブ色 灰褐色	石(1~2) ◎		12
26	环身	口径10.5 器高5.2	底部がやや丸みを帯びる。受部はやや丸みを帯び、たちあがり端部内面の角はやや丸い。	口・回転ナデ 底・回転ハサカ20	回転ナデ	灰色 灰褐色	石・長(1~2) ◎		12

表5 20号墳 出土遺物觀察表 土製品 (No.2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土 (外面) (内面)	焼成	備考	図版
				外面 内面	色調				
27	环身	口径10.4 器高5.4	底部がやや丸みを帯びる。受部はやや丸みを帯び、たちあがり端部内面の角はやや純い。	口:回転ナデ 底:回転ヘケアリ	灰オリーブ色 灰色	密・砂 ○	12		
28	直口壺	口径9.9 器高15.8	内湾する口縁。端部は丸く先細りする。口頭部に凸線および波状文。肩部に2条の凹線および刻文点文。	口:回転ナデ 体:カキメ 体底:ナデ	灰・灰黄色 灰・灰黄色	密・砂 ○	12		
29	甌	口径12.8 器高18.2	大型品。口縁部外面および口頭部前面に波状文。肩部に2条の凹線および刻文点文。径1.7cmの円孔。	口頭:回転ナデ 体上:タキ 体上:カキメ 体下底:ナデ	黒色・灰オリーブ色 黒色・灰オリーブ色 石・長(1~2)	石・長(1~2) ○	12		

表6 21号墳 出土遺物觀察表 土製品 (No.1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土 (外面) (内面)	焼成	備考	図版
				外面 内面	色調				
30	环蓋	口径14.0 器高4.5	口縁端部に形化した凹線状の段。天井部に1条の凹線を温らせ、形微化した棧を有する。	天:回転ナデ 口:回転ナデ	暗灰黄色にはげ に、55°、褐色	密・石・長(1) ○	13		

表7 21号墳 出土遺物観察表 土製品 (No.2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	備考	図版
				外面	内面			
31	壺蓋	口径12.2 器高3.9	扁平な天井部。口縁端部に形化した凹縫状の段。天井部に1条の凹縫を巡らせ、段を表現。	天・回転ナデ 口・回転ナデ	口・回転ナデ 天・回転ナデ+ナデ	灰オーブ色・灰黄褐色 灰オーブ色	石・長(1~3) ○	13
32	壺蓋	口径14.9 器高4.8	口縁端部に内側する明瞭な段。天井部の縁は短く、就きを仄く。	天・回転ナデ 口・回転ナデ	回転ナデ	灰オーブ色 灰オーブ色	密・長(1) ○	13
33	壺身	口径11.8 器高5.4	たちあがりはりはりに傾し、端部に細い1条の凹縫を巡らせる。	口・回転ナデ 底・回転ナデ+ナデ	口・回転ナデ 底・回転ナデ+ナデ	灰褐色・灰・黄褐色 黄灰色	密・砂 ○	13
34	広口壺	口径15.8 器高18.4	外反する口縁の端部を上下に拡張する。球形の体部。全体の約2分の1を欠損。	口・回転ナデ 底・タタキ	口・回転ナデ 体・当て具痕 →カキメ 底・タタキ	灰オーブ色 灰オーブ色	石・長(1~2) ○	13
35	壺	口径(20.0) 残高15.4	外反する口縁の端部を上方に拡張する。	口・回転ナデ 体・平行タタキ	口・回転ナデ 体・当て具痕	灰白色 灰白色	密・砂 ○	
36	壺	口径25.5 残高29.2	外反する口縁の端部を上方にやや強く拡張する。	口・回転ナデ 体・落子ナデ+カキメ	口・回転ナデ 体・当て具痕	灰白色・灰・褐色 灰白色・灰・褐色	密・石・長(1) ○	13
37	壺	口径(23.8) 残高43.0	外反する口縁の端部を上方に拡張する。口縁端部直下に1条の凸縫を巡らせる。	口・回転ナデ 体・落子ナデ+カキメ	口・回転ナデ 体・当て具痕	灰褐色・黑灰色 黒灰色	密・砂粒 内面に釉付着 ○	14

表 8 21号墳周辺堆積土内 出土遺物觀察表 土製品 (No.1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
38	土師皿	口径7.3 底径5.2 器高1.0	口縁部が内湾気味に短く立ち上がる。 より内面に「印」が明る目立つ。	口・回転ナデ 底・回転糸切	回転ナデ 底・回転糸切	黄褐色 黄褐色	石・長(1) ○		14
39	土師皿	口径7.8 底径5.8 器高1.1	口縁部がやや内湾気味に短く立ち上 がる。口縁端部は丸く、強いてナデに より内面に「印」が明る目立つ。	口・回転ナデ 底・回転糸切	回転ナデ 底・回転糸切	橙色 橙色	石・長(1) ○		14
40	土師皿	口径8.4 底径5.7 器高1.2	口縁部が中湾気味に短く立ち上がる。 口縁端部は丸い。	口・回転ナデ 底・回転糸切	回転ナデ 底・回転糸切	橙色・にがい黃褐色 橙色・にがい黃褐色	石・長(1) ○		14
41	土師皿	口径7.6 底径6.2 器高1.2	口縁部が斜め上方に短く立ち上がる。 口縁端部は丸い。	口・回転ナデ 底・回転糸切	回転ナデ 底・回転糸切	橙色 橙色	石・長 ○		14
42	土師皿	口径8.4 底径5.4 器高1.4	口縁部がやや長く外方に立ち上がり、 口縁端部は丸く、ぶ厚い。	口・回転ナデ 底・回転糸切	回転ナデ 底・回転糸切	にがい褐色 にがい褐色	石・長(1),赤色上板 ○		14
43	土師皿	口径8.8 底径5.2 器高1.8	口縁部がやや長く外方に立ち上がり、 口縁端部は丸い。	口・回転ナデ 底・回転糸切	回転ナデ 底・回転糸切	橙色・褐灰色 橙色・褐灰色	石(1) ○		14

表9 21号墳周辺堆積土内 出土遺物観察表 土製品 (No.2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (内面)	胎土	備考	図版
				外面	内面				
44	土鍋Ⅲ	口径8.6 底径1.7 器高1.7	口縁部が内湾気味に長く外方に立上がり、口添の底径に対する割合が高く、内面にナデ調整時に使用したペラ状工具による沈線がみられる。	口・回転ナデ 底・回転糸切	回転ナデ	明黄褐色 明黄褐色	密	焼成 ◎	14
45	土鍋	口径36.2 器高23.2	丸底の底部より直立気味に立ち上がる体縁。外方に弱く開く口縁部。	ナデ	ナデ	橙色・褐色 橙色・褐色	石・長(1~3) ◎	内外面に媒附着	14
46	壺蓋	口径(13.0) 器高3.8	やや扁平な天井部、天井部に細い凹線。口縁端部に内側する明顯な段をもつ。	天・回転ヘアガ 口・回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色・灰色 灰オリーブ色・灰色	密・石・長(1) ◎		
47	壺蓋	口径(14.0) 残高2.4	口縁端部が外方に開く。器部内面に1条の弱い凹線。天井部と口縁部の間に1条の弱い凹線。	天・不明 口・回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密・石(1) ◎		
48	壺蓋	口径15.4 器高1.9	天井部に弱い1条の凹線。口縁端部の段は1条の細い凹線を造らせるごとで表現している。	天・回転ヘアガ 口・回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密・石・長(1~2) ◎		15
49	壺蓋	口径(14.8) 残高1.4	天井部に1条の弱い凹線を造らせることで表現。	天・回転ヘアガ 口・回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰色	密・石(1) ◎		15
50	壺身	口径(12.2) 残高3.2	短く水平にのびる受端。たちあがりは厚く、短く内傾する。口縁端部に段の表現は無い。	口・回転ナデ 底・回転ヘアガ	回転ナデ	浅黄色 灰色	密・石・長(1) ◎		
51	壺身	口径(11.2) 残高4.3	たちあがりは厚く、短い。口縁端部に段を表現しない。	口・回転ナデ 底・回転ヘアガ	回転ナデ	灰色 灰色	密・石(1~2) ◎		

表10 21号墳周辺埴土内 出土遺物観察表 土製品 (No.3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		胎土 (内面)	色調 (外面) (内面)	備考	図版
				外面	内面				
52	环身	口径12.1 器高4.8	口縁端部の段は見られず、たちがあがりが内側ながら短く立ち上がる。	口:回転ナデ 底:回転ナデ(ヘラガ)	回転ナデ	灰白色 灰色	密・長(1) ○		15
53	壺	口径(15.0) 器高5.0	緩やかに外反する口縁。口縁端部をやや上方に拡張する。口縁直下に1条の突帶(および突帯)間に渡状文。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密・石・長(1~5) ○		
54	胞	口径(15.2) 器高2.9	外反する口頭部から、さらに上方に拡張しながら緩やかに外反する口縁部。口縁端部上面に1条の凹線を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密・石・長(1~3) ○	55と同一個体	15
55	胞	残高13.1	上位に最大径をもつ体部。やや太い口縁基部より大きく外反する口頭部。体部上位に1条の明顯および直径1.3cmの円孔。	口縫:回転ナデ 底:回転ナデ(ヘラガ)	回転ナデ	灰オリーブ色・灰色 灰色	密・石・長(1~4) ○	54と同一個体	15
56	壺	口径14.8 器高17.1	器壁が厚く、口縁端部は丸い。上位に最大径を有する球形の体部。	口:回転ナデ 口~体:3キュー付 体長:タタキ	口:回転ナデ 体:指痕・ナデ 底:当て具・指痕	灰白色 灰色	密・石・長(1) ○		15
57	壺	口径23.1 器高46.3	口縁が短く直立気味に外反し、端部は丸い。其の体部上半に最大径を有する。口頭部に「十」のヘラ記号あり。	口端:回転ナデ 口~タスキ・回転ナデ 体底:タスキ・カキメ 底:タタキ	口:回転ナデ 体底:当て具・指痕 底:タスキ・カキメ	灰白色、灰色 灰白色、灰色	長(1~3) ○	ヘラ記号あり 15	

表11 21号墳周辺堆積土内 出土遺物観察表 土製品 (No.4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (内面)	胎土	備考	図版
				外面	内面				
58	甕	口径(21.3) 器高14.4	大きな肩の強る体部。端部を上方に拡張する口縁部。腹部に「山瀬」および波状文。底部に焼成時の凹みが三箇所あり。	口:回転ナデ 頸:カキメ 底:タキ→カキメ	口:回転ナデ 頸下:指頭痕 体:タキ→カキメ 底:タキ→カキメ	灰白色 灰色	石・長(1~2) ◎		16

表12 22号墳 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (内面)	胎土	備考	図版
				外面	内面				
59	环盖	口径(12.9) 器高5.0	天井部は丸みを帯び、天井部と口縁部を分ける棱は明顯。口縁端部に細く内傾する段を有する。	天:回転ヘカズ 口:回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色・灰色 灰色	密 ◎		16
60	环身	口径(10.4) 残高5.1	底部がやや丸みを帯びる。受気が長く外方に突出。たうちあかじが高く端部に内傾する段を有する。	口:回転ナデ 底:回転ヘカズ	回転ナデ	灰オリーブ色	密 ◎		16
61	甕	口径(14.0) 残高2.5	口頸部を外反させた後さらに外方へ屈曲させる。肩部に凸線。凸線の下位に波状文。口縁端部に凹線状のナデ。	輪制の為不規 回転ナデ	明灰色 灰オリーブ色	密・粒 ◎	袖付着		16

表13 23号墳 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (内面)	胎土	備考	図版
				外面	内面				
62	蓋	口径11.9 器高5.4	有蓋高环の蓋。口縁端部に内傾する凹面、やや込みを帯びた天井部の頂部に扁平なツマミ。天井部と口縁部を分ける棱はやや鋸か明瞭。	ツマミ:回転ナデ 天:回転(ハケ)2 口:回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色・灰色 灰オリーブ色・灰色	密・長(1~2) ◎		16
63	壺	底径(8.8) 残高6.9	弔生土器。やや上げ底の底部。	マツツ	マツツ	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長(1~5) ◎		
64	壺	底径(9.4) 残高6.1	弔生土器。平底もしくはやや上げ底の底部。	マツツ	マツツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~6) ◎		

表14 24号墳 出土遺物観察表 土製品 (No.1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (内面)	胎土	備考	図版
				外面	内面				
65	蓋	底径(9.6) 残高8.2	弔生土器。底部が円盤状に突出する。 丸みを帯びた天井部、天井部と口縁部を分ける棱は鋸か明瞭。口縁端部に内傾な内傾する段がある。	工具によるナデ 底:刷突痕	厚:ハケ(3本/cm) 底:刷突痕	明黄褐色 明黄褐色	石・長(1~5) ◎		
66	壺	口径12.0 器高5.1	脚部小片。上位より長方形スカシ、刺突カシ、2条の凹線、波状文、三角形スカシ。	回転ナデ 口:回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色・灰色 灰オリーブ色・灰色	密・L4(1~2) ◎		17
67	器台	残高4.3	列点文、指頭痕・回転ナデ	指頭痕・回転ナデ	指頭痕・回転ナデ	浅黄色 浅黄色	密 ◎		

表15 24号墳 出土遺物観察表 土製品 (No.2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・窓文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
68	瓶	口径(12.4) 器高18.2	上位に最大径をもつ球形の体部。体部最窄部点文。径1.5cmの円孔。やや直線的に立ち上がる口頸部から、強く外方に張り出す凸線を介して口縁部を斜め下方に折張。口縁部に凹縫状のナデを施し唇を表現。頸部に波状文。	口:回転ナデ 口-肩:回転ナデ 頸:指頭痕→ナデ 体:カキメ 体下-底:ナデ 底:指頭痕	口:回転ナデ 頸:指頭痕→ナデ 体:ナデ 底:指頭痕	暗灰色、灰オリーブ色 暗灰色、灰オリーブ色 ○	石・長(1~3)	外面に軸付着	17
69	甕	口径22.6 器高48.7	やや肩の張る体部、シャープに外反する口縁の端部を上下に強く並張。口縁直下に1条の深い凸線をほどこす。	口:回転ナデ 体底:焰ナタキ →カキメ	口:回転ナデ 体:当て具痕 底:工具による削仕	浅黄色・灰色 浅黄色・灰色 ○	密・石・長(1~3)	外面に軸付着	17

表16 14号墳 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
71	瓶	残高4.0	口頸部小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密・石・長(1~5) ○		

表17 調査地表土内 出土遺物観察表 金属製品・石製品

番号	器種	残存	材質	色	法量			備考	図版
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
16	鍔先状		鉄	褐色	(5.3)	(4.5)	(0.8)	(26.76)	11
17	刀		鉄	褐色+朱	(2.6)	(8.7)	(1.0)	(40.37)	11
18	石匁丁	約3分の1	石(緑色片岩)	緑白	(6.67)	(4.3)	(0.5)	(24.46)	11

表18 24号塙 出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	色	法量			備考	図版
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
70	鍔		鉄	褐色	(3.3)	(0.68)	(0.58)	(1.90)	

写 真 図 版

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については 4×5 判や 6×7 判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	レンズ
トヨフィールド45A	スーパー・アンギュロン90mm他
アサヒペンタックス67	ペンタックス67 55mm他
ニコンニューFM2	ズームニッコール28~85mm他
フィルム	白 黒 ネオパンSS・アクロス
	カラー アスティア100F

2. 遺物は、 4×5 判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影しているが、一部についてはカラーリバーサルフィルムも使用している。

使用機材：

カメラ	トヨビュ-45G
レンズ	ジンマーS 240mmF5.6他
ストロボ	コメット/C A32・C B2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウェイトスタンド101
フィルム	カラー アスティア100F
	白 黒 ネオパンアクロス

3. 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー-45MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135mmF5.6A・50mmF2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV R Cペーパー

4. 製 版 写真図版175線

印 刷	オフセット印刷
用 紙	ニューVマット76.5kg
製 本	アジロ綴じ

【参考】『埋文写真研究』Vol.1 ~16

『報告書作成ガイド』

[大西朋子]

調査開始～遺構検出



調査前近景
(西より)



2区掘削状況
(南西より)



2区作業風景
(北西より)



遺構検出状況（南西より）

1 区 の 調 査



20号填検出状況（北東より）



20号填完掘状況（北より）



20号墳周溝内遺物出土状況（北西より）



1区遺構完掘状況（北西より）

2 区 の 調 査



2区遺構検出状況（北東より）



2区遺構完掘状況（北東より）



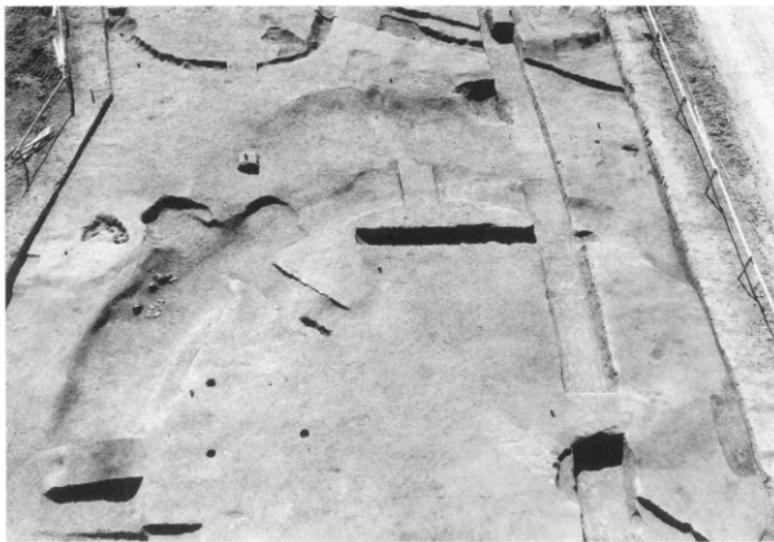
21号墳上層流土内
中世遺物出土状況①
(北西より)



21号墳上層流土内
中世遺物出土状況②
(南東より)



21号墳周溝上層
遺物出土状況
(南東より)



21号墳完掘状況（北東より）



21号墳周溝内遺物出土状況（西より）



2区南側遺構検出状況（北東より）



2区東側遺構完掘状況（西より）



22号填完掘状況（北東より）



14号填完掘状況（東より）



24号墳完掘状況（西より）

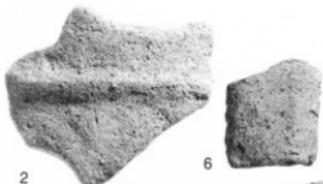


24号墳遺物出土状況（北東より）

出 土 遺 物



7



2

6



3

5



4



17



16



18

試掘調査および調査地表土内出土遺物



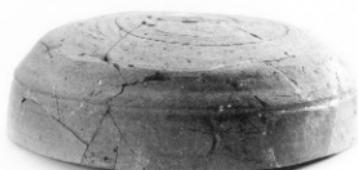
20号墳周溝内出土遺物



30



31



32



34



33



36

21号墳周溝内出土遺物①



37

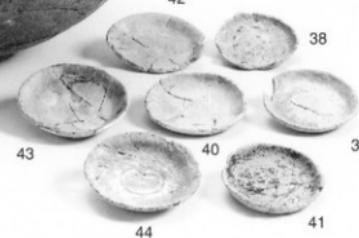


41



45

42



38

39

40

41

43

44

21号墳周溝内出土遺物② 21号墳上層流土内出土遺物



48



49



56



52



55



57

21号墳周辺堆積土内出土遺物①



58

21号墳周辺堆積土内出土遺物②



59



60

61



62

22号墳周溝内出土遺物

23号墳周溝内出土遺物



69



68

24号墳周溝内出土遺物

66

報告書抄録

ふりがな	ひがしのおちゃやだいせいき 6じちょうさち						
書名	東野お茶屋台遺跡6次調査地						
副書名							
卷次							
シリーズ名	松山市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第113集						
編著者名	吉岡 和哉						
編集機関	松山市教育委員会・財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター						
所在地	市教委：〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 Tel.089-948-6605 埋文：〒791-8032 松山市南斎院町乙67-6 Tel.089-923-6363						
発行年月日	西暦2006年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ひがしのおちゃやだいせいき 東野お茶屋台遺跡 6次調査地	えひめけんまつやましひがしの 愛媛県松山市東野	38201	33° 50' 10"	132° 48' 21"	20040716 ~ 20041015	835	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
東野お茶屋台遺跡 6次調査地	古墳	古墳中期 ~ 古墳後期	周溝6条	須恵器	周溝内祭祀 石見型盾形埴輪		

松山市文化財調査報告書 第113集

東野お茶屋台遺跡 6次調査地

平成18年3月31日 発行

編集発行 松山市教育委員会
〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1
TEL (089)-948-6605

財團法人松山市生涯学習振興財團
埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南条院町乙67番地6
TEL (089)-923-6363

印刷 明星印刷工業株式会社
〒790-0056 松山市土居町500番地
TEL (089)-971-7111

